ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第143号

令和３年度における京都府内の埋蔵文化財調査 ----------高野陽子-------- 1
京都府南部における古墳埋葬施設主軸方位の地域性（上） ----------古川　匠-------- 9

研究ノート　木津川水運と東四国 ----------桐井理揮-------- 21
平安京左京一条三坊三町の近世町家遺構について----------加藤雄太-------- 27
古墳時代後期における集落廃絶の背景について ----------小池　寛-------- 37

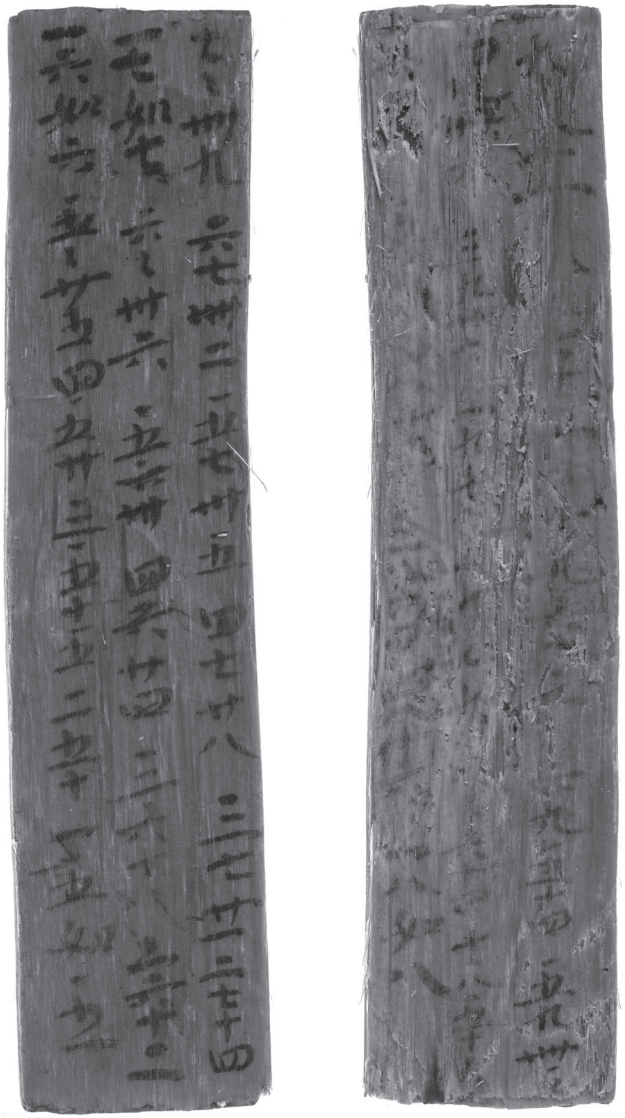
令和３年度発掘調査略報 ----------44
11. カンジョガキ遺跡第２次　12. 幾坂東古墳群・幾坂古墳群
13. 佐屋利遺跡　14. 犬飼遺跡第９次
15. 井手遺跡第６次　16. 犬飼遺跡第11次
17. 春日部遺跡第５次　18. 水主神社東遺跡第16次
19. 小樋尻遺跡第12・13次　20. 鶴尾遺跡第２次
長岡京跡調査だより・139 ----------57
普及啓発事業（令和４年３月～令和４年６月）----------59
センターの動向（令和４年３月～令和４年６月）----------60

2022年7月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

靏尾遺跡出土九九木簡

裏　表



赤外線写真（撮影：奈良文化財研究所）

たて　二一九ミリ、横　四九ミリ、厚さ　六ミリ

裏　表

（撮影：当調査研究センター）

令和３年度における京都府内の埋蔵文化財調査

高 野 陽 子

１．はじめに

令和３年度の当調査研究センターの発掘調査件数は、18件を数える。事業別にみると、京都府南部で実施してきた新名神高速道路関係遺跡の調査がピークを越え、南丹地域の国営農地整備事業とともに、令和２年度から着手した大宮峰山道路関係遺跡の発掘調査が本格化し、北部の調査が大きな割合を占めるようになっている。

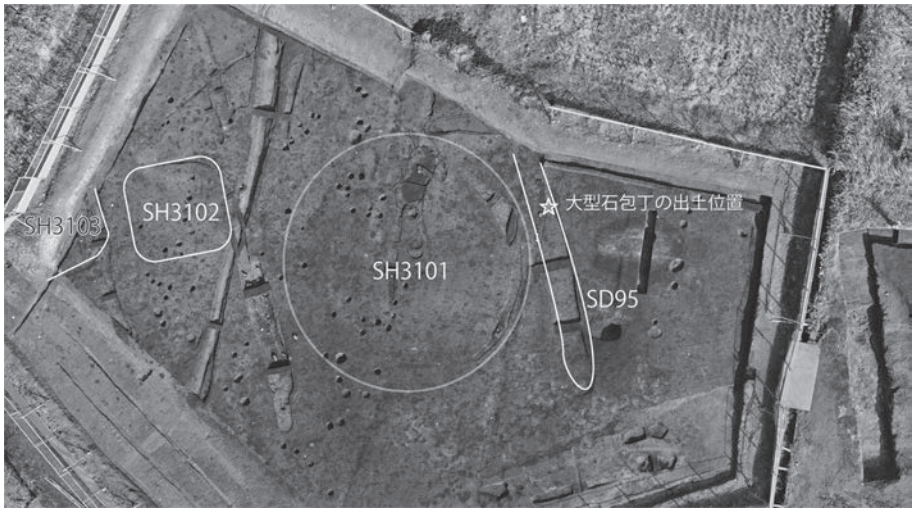
令和３年度に京都府内で実施された発掘調査の成果について、当調査研究センターの事業を中心に、府内各地域の調査成果を時代を追って概観したい。

２．各時代の調査成果

（１）旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡としては、福知山市稚児野（ちごの）遺跡の調査において、後期旧石器時代前半の約600点の石器が出土した。昨年度の調査とあわせ、1,200点以上の石器が出土している。今年度の調査では、19カ所におよぶ石器集中部（ブロック）を検出し、近畿地方で２例目となる環状ブロックの存在が明らかになった。石器にはナイフ形石器などのサヌカイト製の剥片石器やシルト岩製の刃部磨製石斧などから構成される。これらの中には、二上山産とみられるサヌカイトや隠岐島産黒曜石が含まれ、遠隔地への移動や交流が行われたとみられる（当調査研究センター）。

稚児野遺跡（福知山市）



佐屋利遺跡（京丹後市）

縄文時代の遺跡では、京丹後市大宮町カンジョガキ遺跡の調査で、縄文時代の自然流路を検出し、流路内から早期末と推定される鉢形土器や加工木が出土している（当調査研究センター）。

（２）弥生時代

京丹後市佐屋利（さやり）遺跡では、弥生時代中期後半の集落跡を確認した。遺構は３期に分かれるとされ、竪穴建物や柱穴群、土坑、溝等を検出した。竪穴建物は、径９ｍの大型円形建物１基を検出し、周囲の溝から長さ約30㎝の大型石包丁２点が重ねられた状態で出土した。農耕儀礼に関わる祭祀が行われた可能性がある。また、表面にシカを描いた可能性がある絵画土器の小片が出土している（当調査研究センター）。

長岡京市長岡京跡右京第1241次調査では、弥生時代の竪穴建物１基を検出した。一辺約４ｍの方形に復元され、出土土器から後期後葉の建物と推定される（当調査研究センター）。

（３）古墳時代

京丹後市幾坂（いくさか）古墳群・幾坂東古墳群では、平地との比高差80ｍ以上を測る高所に築造された中期古墳の調査を実施した。幾坂古墳群では方墳３基を含む丘陵上の５基を調査し、最も高所にある40号墳では、組合式木棺から、鉄剣や鉄鉾、鉄鏃などの多くの鉄製品とともに、緑色凝灰岩製管玉や瑪瑙製勾玉、蛇紋岩製勾玉・同棗玉・同臼玉、ガラス製小玉など多様な玉類や竪櫛などの漆塗り製品が出土した。また、幾坂東２号墳では、舟底状木棺から鉄鉇とともに緑色凝灰岩製管玉や蛇紋岩製勾玉、ガラス小玉などが出土した（当調査研究センター）。

亀岡市法貴北（ほうききた）古墳群では、古墳時代後期の横穴式石室墳の調査を実施した。５号墳と20号墳の２基の円墳を調査し、径８ｍの５号墳からは無袖式の横穴式石室を検出し、大型台付長頸壺や平瓶が出土した。また、径６ｍの円墳である20号墳からは小型の横穴式石室を検出し、金銅製の耳環などが出土した。さらに、周辺では横穴式石室墳とほぼ同時期の木棺直葬墳や小石室が確認された（当調査研究センター）。

亀岡市春日部（かすかべ）遺跡は、法貴北古墳群の南東約1.5kmに位置し、古墳時代後期の竪穴建物４基が見つかっている。令和２年度に調査した犬飼（いぬかい）遺跡や法貴古墳群を含め、国営ほ場整備の関係調査

で広域の発掘調査が行われており、古墳時代の集落と墓域の関係が検討できる資料が得られた（当調査研究センター）。

八幡市木津川河床遺跡では、古墳時代前期の竪穴建物１基と溝、さらに飛鳥時代の竪穴建物２基を検出した。前期初頭の一辺約５ｍの方形を呈する竪穴建物からは、阿波系土器が出土した。前期前葉の溝は、幅約2.4ｍを測り、投棄されたとみられる多量の土器が出土している。また、飛鳥時代の建物跡は木津川河床遺跡でははじめて確認されたもので、鉄滓や炭化物が出土していることから工房と推定される（当調査研究センター）。

城陽市史跡久津川（くつかわ）車塚古墳（全長175ｍ）では、墳丘東側のくびれ部を中心に発掘調査が実施さ

幾坂古墳群（京丹後市）

法貴北古墳群（亀岡市）

れ、段築の中段テラスで円筒埴輪列が検出された(城陽市教育委員会)。

城陽市小樋尻(こひじり)遺跡では、古墳時代前期初頭の素掘りの井戸２基や、古墳時代後期の竪穴住居跡２基、溝状遺構などが見つかっている(当調査研究センター)。

京田辺市天理山(てんりやま)古墳群は、円墳からなる古墳群とされてきたが、踏査の成果を受けた試掘調査が実施され、１号墳が全長57mの前方後円墳、３号墳が全長87mの前方後円墳、４号墳が全長42mの前方後方墳であることが明らかになった。３号墳のくびれ部からは円筒埴輪列が検出され、前期後半の築造が明らかになった。木津川の河川交通の要衝に形成された前期後半の首長墓群の存在が新たに判明した意義は大きい(京田辺市)。

（４）古代

京丹後市鶴尾(つるお)遺跡では、奈良時代の溝や土坑から、木簡や墨書土器が出土した。木簡は「九九木簡」を含む３点が出土し、墨書土器６点が出土した。九九木簡は、掛け算九九の九の段から五の段まで丁寧に墨書されたもので、片面に九と八の段、もう片面に七～五の段と、全体で35個の九九が記されている。これまで国内で見つかっている約80例のなかで、最も多くの九九を記した資料である。また、同時に「大」「工」「西」「倉？」「政？」などが書かれた墨書土器が出土している。九九木簡は、徴税の際の九九早見表として利用されたとみられ、同遺跡が官衙に関係する遺跡である可能性が高まった(当調査研究センター)。

舞鶴市菖蒲谷口(しょうぶだにぐち)遺跡では、丘陵谷部で平安時代前期と推定される掘立柱建物跡２棟や柱穴群を検出した。従来、確認されていた集落域が拡がり、谷の奥部まで開発されたことが明らかになった(当調査研究センター)。

京丹後市佐屋利遺跡では、平安時代後期から中世にかけての掘立柱建物跡や流路を検出した。流路からは黒色土器や輸入陶磁器とともに、呪符木簡が出土した(当調査研究センター)。

鶴尾遺跡(京丹後市)

長岡京市乙訓寺（おとくにでら）は、飛鳥時代に推古天皇の命で建立されたとされ、長岡京期に大寺院として整備された寺院である。第29次調査では、これまで不明であった主要建物の一角である長岡京期の南門と回廊とみられる遺構が検出された。南門を構成する可能性がある大型掘立柱建物の柱穴は、1.4m四方の大規模なものである。また、大型掘立柱建物の東に位置する柱穴は南北1.3m、東西0.8mの規模をもち、柱間10尺等間の約３m間隔で構成される。柱構造は、長岡京期の大規模邸宅と同様の規模をなすことから、南門の回廊の可能性が高く、これまで不明であった乙訓寺の中心伽藍の一端とされる（長岡京市教育委員会）。

長岡京市長岡京跡左京第634次調査では、五条大路の南北側溝と東二坊坊間西小路の東西側溝、さらに掘立柱建物跡、井戸等が見つかった。五条大路の両側溝は幅約1.0mを測り、延長15m分

上野遺跡（京丹後市）

長岡京跡右京第1241次（長岡京市）

井手寺塔跡調査説明会（綴喜郡井手町）

を確認した。南側溝からは、獣骨や「大」と墨書された土器が出土している（長岡京市埋蔵文化財センター）。

長岡京市長岡京跡右京第1241次調査では、西一坊大路の東側溝と掘立柱建物跡が確認された。調査地は、長岡京跡右京七条一坊十五・十六町にあたる。東側溝は、幅約1.3m、深さ0.25mを測り、南北に29.4m分を検出した。掘立柱建物は、２間×５間以上の南北棟の庇付建物であり、建物の規模が大きく、円面硯や墨書土器が出土していることから、公的施設と推定され、近隣に所在が想定される西市との関係が窺われる（当調査研究センター）。

木津川市史跡恭仁宮（くにきゅう）跡では、第102次調査で、朝堂院北辺を区画する掘立柱塀を検出し、「大伴」や「日奉」「万呂」などの刻印をもつ「恭仁宮式文字瓦」が出土した（京都府教育委員会）。

井手町栢ノ木遺跡の調査では、令和２年度に、橘諸兄創建の井手寺跡の伽藍の外に配置された塔院内で、五重塔の基壇と推定される乱石積み基壇が見つかっている。奈良時代の瓦に加えて、平安時代前期の瓦が相当量含まれ、富寿神宝（818年初鋳）が地鎮に使われていたことなどから、嵯峨天皇の皇后となった橘嘉智子の時代に完成した塔跡と推定される。令和３年度は、年度当初に、現地説明会や地元への調査説明会を実施し、約655人の見学者を迎えた。説明会の終了後、保存のため現地の埋め戻しを実施した（当調査研究センター）。

（５）中世

八幡市木津川河床遺跡では、平安時代末期から鎌倉時代初頭の井戸や土坑、柱穴等が見つかった。井戸は、一辺約1.2mの縦板横桟組の木組み井戸であり、規模約５mの六角形の堀形をもつ。天皇の行幸の際の参詣道とされるのちの御幸道に面し、これまで不明であった周辺の中世の土地利用が判明した（当調査研究センター）。

亀岡市犬飼遺跡では、法貴谷川の扇状地上に形成された古代末期から中世にかけての集落を調査し、平安時代末期から鎌倉時代にかけての建物跡や、古墓、溝などを検出した。居住域に隣接

する墓からは、白磁椀や青白磁小壺など、輸入陶磁器が出土している（当調査研究センター）。

亀岡市井出遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡５棟、石組み井戸を含む井戸３基を検出した。山陰、丹後、摂津・播磨への分岐点となる小盆地に位置し、近年の数次にわたる調査と合わせて、中世初期の集落形成の一端が明らかになった（当調査研究センター）。

宇治市宇治市街遺跡は、宇治川を挟み東西に大きく広がる遺跡であるが、遺跡の西側周縁部で調査を実施し、古代末期から中世の建物跡等を検出した。宇治街区の縁部における平安時代末期と戦国時代のあらたな開発がわかる資料となった（当調査研究センター）。

京都市富ノ森城跡は、桂川と宇治川に挟まれた沖積地に立地し、室町時代の平地居館として知られる。この居館跡推定地北東約50mの地点の調査で、２か年にわたり調査が実施され令和３年度の調査では、鎌倉時代前半期の４条の区画溝が検出された（京都市埋蔵文化財研究所）。

京都市右京区の平安京跡右京四条三坊三町の調査では、平安時代後期から鎌倉時代前半の掘立柱建物跡２棟や900基以上の柱穴群、区画溝、石組み井戸などが見つかった。中世初期の「小泉庄」に関連する荘園管理施設の可能性が指摘される（京都市埋蔵文化財研究所）。

（６）近世

京都市下京区御土居・平安京跡右京六条一坊三町の調査では、豊臣秀吉によって築かれた御土居の濠跡から、慶長丁銀に刻印する「常是」文字が刻まれた極印鑽（たがね）が出土した。発掘調査における出土例としては、はじめての例となった（京都市埋蔵文化財研究所）。

京都市伏見区伏見城跡の調査では、朝鮮出兵開始後の文禄元（1592）年に豊臣秀吉により建設の始まった指月城期の遺構と慶長の大地震後に豊臣秀吉が築き、徳川家康によって再整備された木幡山城期の２時期の遺構が確認された。指月城期の遺構としては、石垣基礎や階段が検出され、

犬飼遺跡（亀岡市）

犬飼遺跡中世墓

木津川河床遺跡（八幡市　右後方に石清水八幡宮）

推定範囲が従来よりも北側に広がることがわかった。木幡山城期の遺構は、石垣・門・溝等が検出され、絵図から浅野但馬守（浅野長晟）の屋敷地に関連する武家屋敷の遺構とみられる。（京都市埋蔵文化財研究所）。

京都市伏見区淀城跡（長岡京跡左京第657次）の調査では、淀藩家老屋敷があった東曲輪地点の調査が行われ、18世紀中頃～後半の石垣を基礎にもつ建物跡等が検出された。軟弱地盤への工法とされる、礎石と礎石を石柱でつなぐ「蝋燭基礎」が19カ所で確認された（京都市埋蔵文化財研究所）。

八幡市木津川河床遺跡では、江戸時代の大規模な水路と、水路と接して平行する２条の溝が見つかった。水路は、杭を密に打ち込むことによって片岸を護岸しており、幅７ｍ・深さ1.2ｍの規模を測る。２条の溝は、幅約5.4ｍの間隔を保ち、平行に掘削されていた。石清水八幡宮絵図に描かれた「御幸道」と並走する東西水路と推定される（当調査研究センター）。

３．おわりに

令和３年度の当調査研究センターの調査では、本格的な旧石器時代遺跡の発掘調査として継続している福知山市稚児野遺跡で、あらたに旧石器時代後期の環状ブロックを検出したことや、京丹後市鷹尾遺跡で奈良時代の掛け算九九の早見表とされる九九木簡が出土したことなど、とくに北部の調査で大きな発掘調査成果がみられた。また、新型コロナウイルスの感染拡大がなお続く状況ではあるが、感染対策のための充分な対策を講じたうえで、現地説明会や埋蔵文化財セミナー、「発掘された京都の歴史2021」などの普及啓発活動を実施し、それぞれの催しに府民をはじめとする多くの方々のご参加をいただいた。

（たかの・ようこ＝当調査研究センター調査課課長補佐兼調査第２係長）

京都府南部における古墳埋葬施設主軸方位の地域性（上）

古川　匠

１．はじめに

京都府南部の南山城地域中央を南北に流れる木津川の両岸には、古墳時代前・中期を中心に多くの大型古墳が築造された。このうち左岸北部の現在の八幡市・京田辺市域に相当する、旧綴喜郡の大部分に展開する前方後円墳、大型円墳及び大型方墳といったいわゆる「首長墓」群を一体的な古墳群ととらえ、「綴喜古墳群」と呼称する。(注1)

筆者は綴喜古墳群がひとつの首長墓群として完結したまとまりであることを示す指標の一つとして、各古墳の埋葬施設の主軸方位を挙げた。(注2) そして、木津川左岸地域は、綴喜古墳群の位置する北部地域と、現在の精華町及び木津川市西部にあたる南部地域の間には、特に地形的障壁が無く一体的な地域とも一見みなしうるが、古墳埋葬施設の主軸方向を比較すると、北部の綴喜古墳群の埋葬施設は東西方向を指向し、南部の鞍岡山古墳などの埋葬施設は南北方向を指向することから、古墳造営主体は別の集団であると評価した。

上記の評価は妥当なものと考えているが、本稿ではもう少し視野を広げ、京都府南部を中心に近隣地域も含んだ範囲を対象に、主に前期から中期前葉（和田晴吾編年一～六期、(注3) 広瀬和雄編年１～５期）(注4) の古墳埋葬施設の主軸方位について比較検討してみたい。古墳研究のなかで埋葬施設の方位は独立した一つのテーマとして注目されているが、綴喜古墳群をはじめとする京都府南部の古墳埋葬施設の主軸方位は、前期後葉から中期前葉（和田三～六期・広瀬３～５期）にかけて特徴的な様相を示すためである。

２．先行研究

古墳埋葬施設の頭位は、古墳における葬制、地域間関係、さらに古墳時代の方位観念を検討する上で研究の対象となってきた。

近畿地方中央部の前期古墳の埋葬施設頭位について、都出比呂志は北頭位が優勢であることを主張した。(注5) そして、例外的に東西に主軸をとる事例として、前期後葉の京都府鳥居前古墳、大阪府北玉山古墳、駒ヶ谷宮山古墳、茨木将軍山古墳などを挙げている。(注6) また、茨木将軍山古墳と奈良県宮山古墳には埋葬施設主軸が東西方位で石槨石材に結晶片岩を使用するという共通性があることに注目し、四国地方の特に阿波地域との関係を想定した。阿波地域では古墳埋葬施設は東西方位が優勢で結晶片岩を産出するためである。

橋本達也(注7)は、結晶片岩など東四国産の石材を多用し、積石塚古墳を築造する河内の松岳山・玉手山古墳群と東四国地域の間に密接な関係があると評価した。そして、玉手山古墳群に属する北

玉山古墳と駒ケ谷宮山古墳の埋葬施設が東西方位を採用することも、東四国との関係を示すものと位置づけている。

福永伸哉(注8)は、森田克行(注9)による結晶片岩が用いられた古墳の集成を引用し、前出の茨木将軍山古墳に限らず摂津及び北河内地域の淀川流域に位置する古墳では結晶片岩の使用量が多く、箱式石棺や葺石材にも使用されることを指摘した。そして、同時期の遺跡で阿波地域の土器が一定量搬入されていることから、結晶片岩産出地である阿波地域との関連が深いと評価した。さらに、北四国の前期古墳では、讃岐地域で埋葬施設の方位が東西に限定されるのに対し、阿波地域では東西方位と南北方位が混在することに注目し、四国地方の阿波地域と近畿地方の淀川流域との相互作用という視点を新たに提供した。

北條芳隆(注10)は、北を指向する近畿地方の古墳埋葬施設の大多数の事例について天体との関係を検討し、特に北斗七星の柄の端に位置する星、「揺光」の周回軌道の範囲内に収まることを指摘している。また、少数の東西方位事例のうち、特に京都府大山崎町の鳥居前古墳については、夏至の日の入り方位に照準を定めた可能性を指摘した。さらに、北頭位の優勢は、中国の北辰信仰からの影響を受けているが、当時の倭人の技術では北天の星空を観測することは困難であり、日中の太陽の運行と影から、まず東西を割り出し、派生的に南北を導出したと解釈した。

下垣仁志(注11)は、木津川左岸の綴喜古墳群北部に位置する八幡市男山・美濃山丘陵に展開する首長墓の検討のなかで、この地域の前中期古墳の埋葬施設が際立って東西指向を示すことを指摘している。ただし、結晶片岩が埋葬施設に採用されないことから、東西主軸の埋葬施設が築造された理由は、阿波地域との関連が深い淀川本流沿岸とは異なると想定した。そして、東西主軸の埋葬施設は従属的な埋葬施設によく見られることから、当地域の古墳被葬者が、古市古墳群の巨大古墳被葬者への従属を示すためにこうした墓制が採用されたと推定している。

このように、淀川流域では、摂津及び北河内地域に位置する淀川本流沿岸の古墳埋葬施設と東四国との関係が主に注目されてきたが、淀川の支川にあたる桂川、木津川、宇治川の沿岸といった、京都府南部の山城地域の様相は下垣の論考を除くとこれまでまとめて検討されてこなかった。本論では、山城地域の前・中期古墳埋葬施設主軸方位の検討を中心に、さらに他地域の古墳との比較も試みる。

３．分析の手法

山城地域を中心に、前期から中期前半の古墳埋葬施設主軸方位について検討するが、分析の手法としては、360度の方位を８分割し、埋葬施設主軸が座標方位の北（真北）－南（真南）軸から左右22.5度、合計45度の範囲に収まる場合は「北－南主軸」、東（真東）－西（真西）軸から左右22.5度、合計45度の範囲に収まる場合は「東－西主軸」とする。この範囲から外れる場合は、振れる方向に従って、それぞれ「北東－南西主軸」、「北西－南東主軸」とする。調査報告によっては、埋葬施設の主軸方位を明記していないものがあるが、その場合は報告掲載図面から導出した。

４．事例の分析（京都府中・南部）

（１）南山城地域

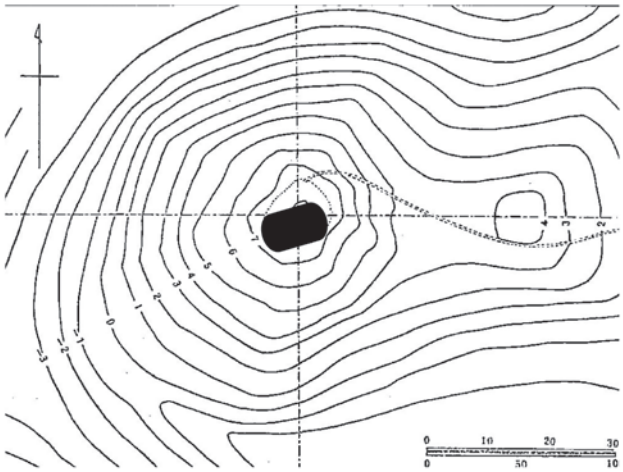
山城地域は20世紀まで盆地中央部に位置した巨椋池を境に南北に分かれるが、南側が南山城地域となる。この地域では、盆地中央部を南北に木津川が貫流し、両岸に各時期の古墳が展開した。

①綴喜郡西部（八幡市・京田辺市）・木津川左岸北部（第１図）

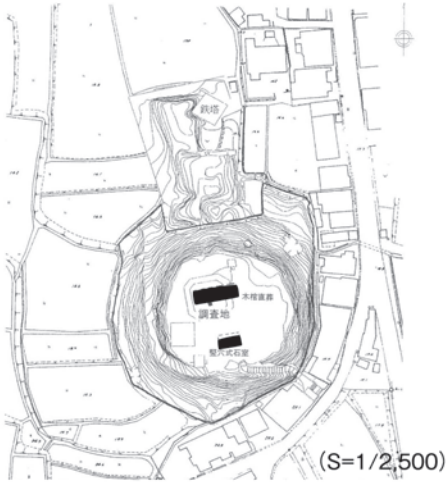
木津川左岸北部にあたる、旧綴喜郡西部で展開する首長墓群は、「綴喜古墳群」と呼称されるようになったが、綴喜古墳群をさらに南北に細分すると、北部の八幡市域では下垣仁志の指摘[注12]のとおり、前方後円墳の埋葬施設は東－西主軸が優勢である。綴喜古墳群における最大規模墳である前期後葉の八幡西車塚古墳（120m前方後円墳、和田三期・広瀬３期）は、後円部で２基の埋葬施設が検出され、後円部南寄りは竪穴式石槨、後円部北寄りは木棺直葬である。いずれも東－西主軸である。さらにもう１基、後円部中央に東－西主軸の埋葬施設が存在する余地があり、もし存在するとすれば、古墳築造時に最初に造られた埋葬施設である可能性がある[注13]。中期初頭の石不動古墳（88m前方後円墳、和田五期・広瀬４期）は、後円部に南北に並ぶ２基の粘土槨が確認されており、いずれも東－西主軸である。また、中期初頭の八幡東車塚古墳（90m前方後円墳、和田五期・広瀬４期）では後円部と前方部に１基ずつ埋葬施設が存在していたようである。前方部埋葬施設の詳細は不明であるが、後円部埋葬施設は、粘土槨中に東西方向の木棺の痕跡と考えられる凹みが確認されていることから、東－西主軸と判断できる。中期前葉の美濃山王塚古墳（76m帆立貝形墳、和田六期・広瀬５期）は、後円部で少なくとも１基の粘土槨が存在したことが判明している。粘土槨内の東西に長く配置された副葬品の出土状況から、東－西主軸と考えられる。一方、前期末のヒル塚古墳（52m方墳、和田四期・広瀬４期）は墳頂部で粘土槨２基、埴輪棺１基が検出されているが、いずれも北東－南西主軸である。また、前期後葉の八幡茶臼山古墳（50m前方後方墳、和田三期・広瀬３期）の後方部埋葬施設は竪穴式石槨で、阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺が納められる。八幡市域では数少ない、北－南主軸の埋葬施設である。

各古墳の所属時期を見ると、唯一、北－南主軸を採用する八幡茶臼山古墳が前期後葉に位置づけられる。一方、八幡西車塚古墳をはじめ、東－西主軸を採用する前方後円墳の造営時期は、前期末から中期前葉に中心がある。埋葬施設の主軸の違いは時期差とも推定しうるが、最近の検討で八幡西車塚古墳出土埴輪の時期がＩ群に属する可能性があることが新たに判明した[注14]ため、八幡茶臼山古墳と八幡西車塚古墳は前期後葉に同時併存する可能性が生じてきた。八幡西車塚古墳の編年上の位置付けは重要な問題であるが、少なくとも、八幡市域では北－南主軸の埋葬施設は同地域で大型古墳が立て続けに造られはじめる前期後葉の一時期だけに限定され、その後、前期末から中期前葉の大型古墳では、逆に東－西主軸が主流となることを指摘しておく。繰り返すが、この地域の大きな特徴である。

一方、南部の京田辺市域は、東－西主軸と北－南主軸の古墳が混在する。前期後葉の天理山４号墳（42m前方後方墳、和田三期・広瀬３期）は、後方部墳頂で墓壙が検出されているが、その平

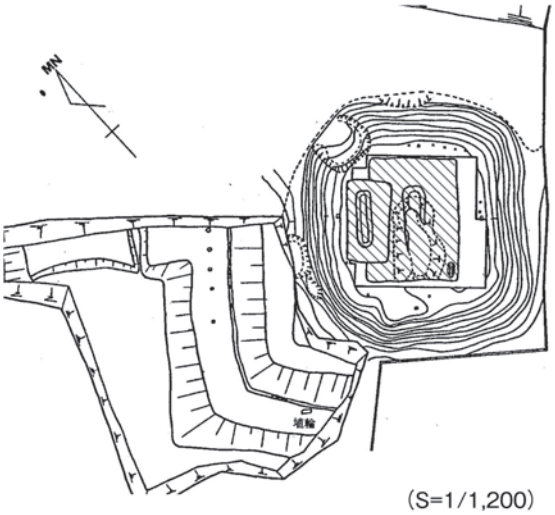


八幡市・石不動古墳（中期初・東－西）　(S=1/1,200)



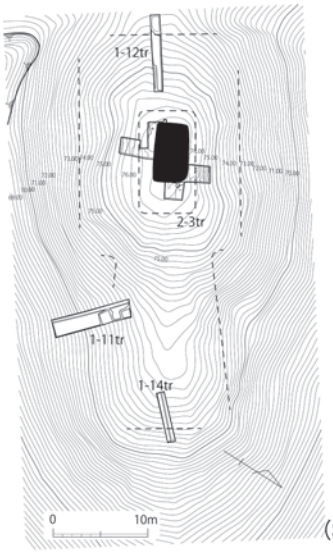
(S=1/2,500)

八幡市・八幡西車塚古墳（前期後葉　東－西）



(S=1/1,200)

八幡市・ヒル塚古墳（前期末　北東－南西）

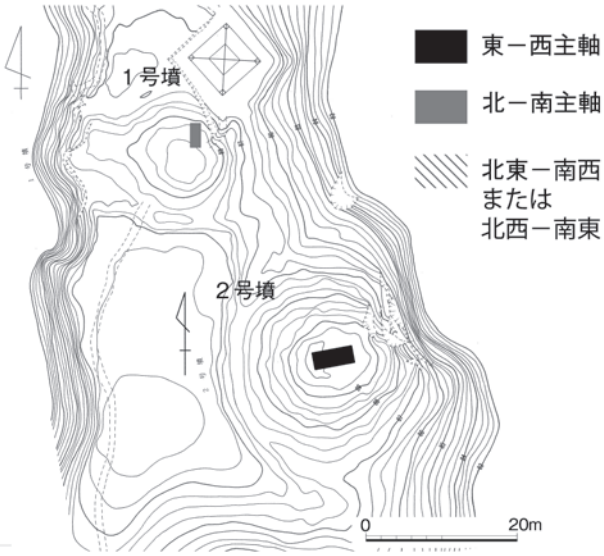


(S=1/800)

京田辺市・天理山４号墳（前期中葉・東－西）

(S=1/1,200)

京田辺市・飯岡車塚古墳（前期後葉・北－南）



京田辺市・興戸１・２号墳（S=1/1,000）
（１号墳：中期初・北－南、２号墳：前期末・東－西）

第１図　綴喜郡西部(木津川左岸北部)の事例

面形状から、埋葬施設は東－西主軸と考えられる。同時期の飯岡車塚古墳（90m前方後円墳、和田三期・広瀬３期）は京田辺市域最大の前方後円墳であるが、埋葬施設は竪穴式石槨で、北－南主軸が採用されている。前期末の興戸２号墳（32m円墳、和田四期・広瀬４期）では、墳頂部で東－西主軸の粘土槨が検出されている。立地が２号墳と近接する、中期初の興戸１号墳（24m前方後円墳、和田五期・広瀬４期）は後円部北部で北－南主軸の埋葬施設が確認された。ただし、後円部墳丘中心からずれるため、副次的な埋葬施設の可能性がある。

京田辺市域では、最大規模の前方後円墳である飯岡車塚古墳が北－南主軸を採るのが目立つが、天理山４号墳、興戸２号墳のように、東－西主軸の古墳も一定認められることがわかる。

改めて木津川左岸北部の全体を俯瞰すると、東－西主軸の埋葬施設を採用する古墳は北部の八幡市域で多く、南部の京田辺市域では東－西主軸と北－南主軸が拮抗する。北に隣接する八幡市域の古墳からある程度影響を受けた結果、南部の古墳でも東－西主軸が採用されたと推定できる。

②久世郡（宇治市・久御山町・城陽市）・木津川右岸北部（第２図）

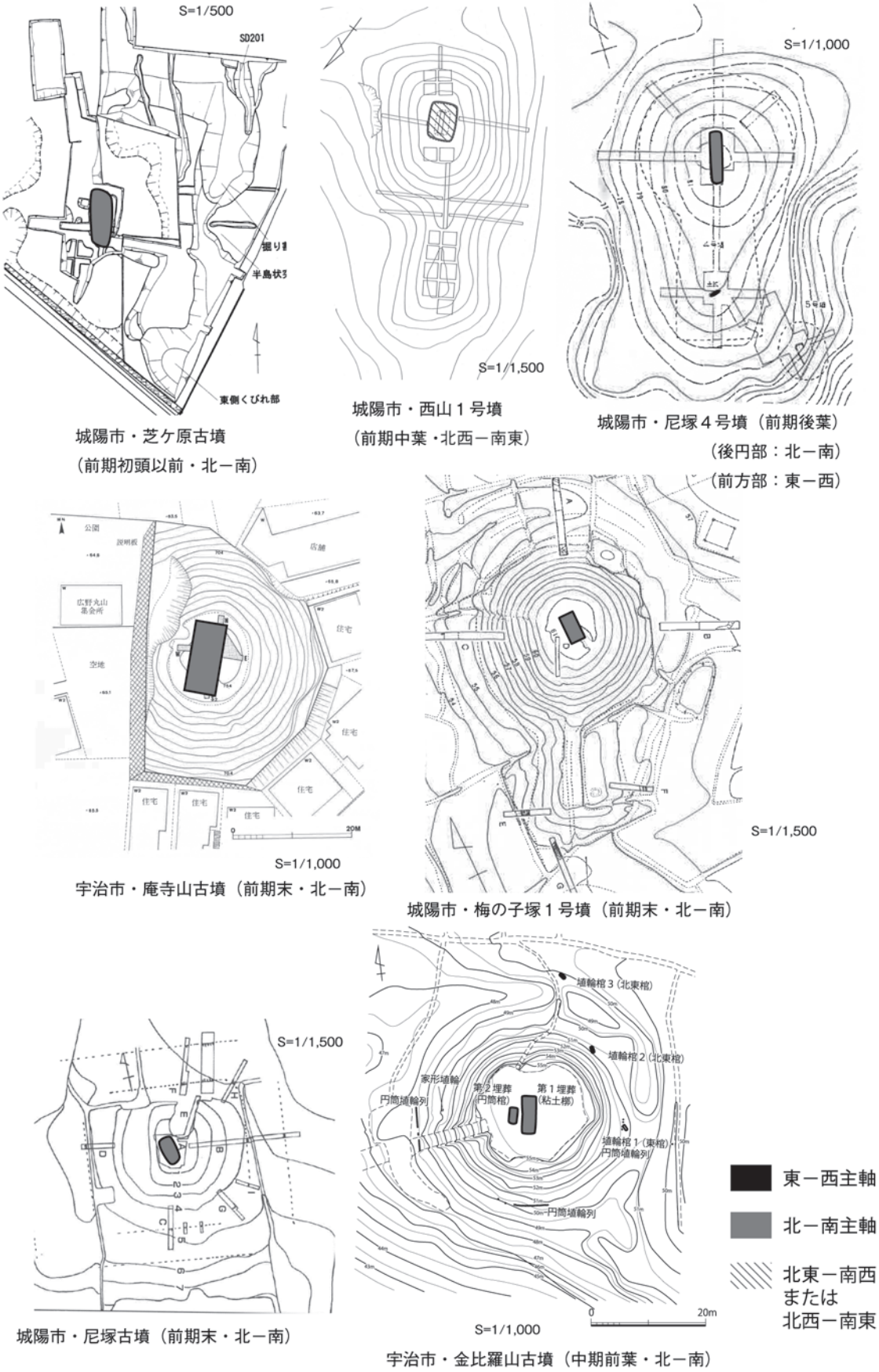
綴喜郡西部からみて対岸の木津川右岸北部に位置する旧久世郡の首長墓では、埋葬施設主軸方位は北－南主軸が主体で東－西主軸はほとんど存在せず、対岸の綴喜郡とは対照的な様相を呈する。

初期の事例では、芝ヶ原古墳（12号墳）（21m前方後方墳・前期初頭以前）が挙げられる。後方部に木棺直葬の埋葬施設が検出されており、北－南主軸である。時期が下がって前期末の宇治市庵寺山古墳（56m円墳、和田四期・広瀬４期）と中期前葉の宇治市金比羅山古墳（40m円墳、和田六期・広瀬５期）では墳丘中央部に粘土槨と円筒棺を主体とする２基の埋葬施設が検出されているが、いずれも北－南主軸である。前期末の城陽市尼塚４号墳（35m前方後円墳、和田四期・広瀬４期）、前期中葉の城陽市西山１号墳（82m前方後円墳、和田二期・広瀬２期）は、後円（方）部の埋葬施設が北－南主軸である点が共通する。尼塚４号墳の前方部埋葬施設だけが東－西主軸であるが、位置と規模から副次的な埋葬施設と位置づけられる。同時期の城陽市尼塚古墳（墳丘長37～40m方墳）の埋葬施設も、同様に北－南主軸である。

久世郡では、このほか、前期中葉の宇治市一本松古墳（28m方墳または35m円墳、和田二期・広瀬２期）、中期前葉の宇治市丸山古墳（37m前方後円墳、和田六期・広瀬５期）、前期中葉の城陽市西山２号墳（25m方墳、和田二期・広瀬２期）・４号墳（25m円墳）、中期前葉の芝ヶ原11号墳（狐塚古墳）（58m帆立貝形墳、和田六期・広瀬５期）、尼塚１～６号墳（前期後葉～中期前葉）の埋葬施設が調査されている。このうち、尼塚３号墳（18m円墳・中期前葉）だけが東－西主軸であるが、ほかはすべて北－南主軸が採用されている。

③相楽郡（木津川市・精華町）・木津川右岸南部、左岸南部（第３図）

相楽郡の大部分を占める木津川市では、木津川右岸南部の大型古墳として、著名な椿井大塚山古墳（175m前方後円墳、和田二期・広瀬２期）がまず挙げられる。三角縁神獣鏡をはじめとする大量の銅鏡が出土したことで著名な後円部竪穴式石槨は北－南主軸である。墳丘主軸からは斜行して北－南を指向していることから、埋葬施設の北枕が重視されていたことがわかる事例である。



第２図　久世郡（木津川右岸北部）の事例

椿井大塚山古墳に後続する前期後葉の平尾城山古墳（110m前方後円墳、和田三期・広瀬３期）は、後円部で埋葬施設が３基確認されているが、全て北－南主軸であることが確認されている。中小規模の古墳では、瓦谷古墳群、内田山古墳群の埋葬施設が判明している。前期末の瓦谷１号墳（48m前方後円墳、和田四期・広瀬４期）は、後円部で埋葬施設２基が検出されており、いずれも北－南主軸である。ただし、近接する中期前葉の瓦谷２号墳（10m方墳）は東－西主軸を採る。内田山古墳群では、内田山B１号墳（一辺17.5m方墳・中期前葉）の墳頂で数基の埋葬施設が検出されたが、いずれも北東－南西主軸であった。

木津川左岸南部の精華町域では、前期末から中期初頭に築造された鞍岡山２・３号墳で埋葬施設が調査されている。２号墳（25m円墳）では２基の埋葬施設が隣接して検出され、北東－南西主軸であった。３号墳（40m円墳）でも同様に２基の埋葬施設が検出されているが、中央の最も大きな埋葬施設は北－南主軸を採る。そして、この埋葬施設が埋められた後に設けられた小型の埋葬施設は、東－西主軸を採っていた。調査事例は少ないが、特に鞍岡山３号墳はこの小地域では最大規模の前期古墳で、鉄製短甲をはじめとする豊富な副葬品が出土した重要な古墳である。当古墳の調査から、木津川左岸南部でも木津川右岸と同様に、北－南主軸が重視されていた可能性が高いと判断される。

④小結

木津川左岸北部では、八幡市域の古墳で東－西主軸が主流を占め、京田辺市域もそれに準ずるのに対し、木津川右岸南・北部および木津川左岸南部といった南山城の他の全地域では、北－南主軸の埋葬施設が主体で東－西主軸の埋葬施設は副次的な埋葬施設または小型墳の埋葬施設に限定される。すなわち、東－西主軸の埋葬施設を採用したのは、首長墓では綴喜郡西部の八幡市域、京田辺市域にまたがる綴喜古墳群に限定されるのである。

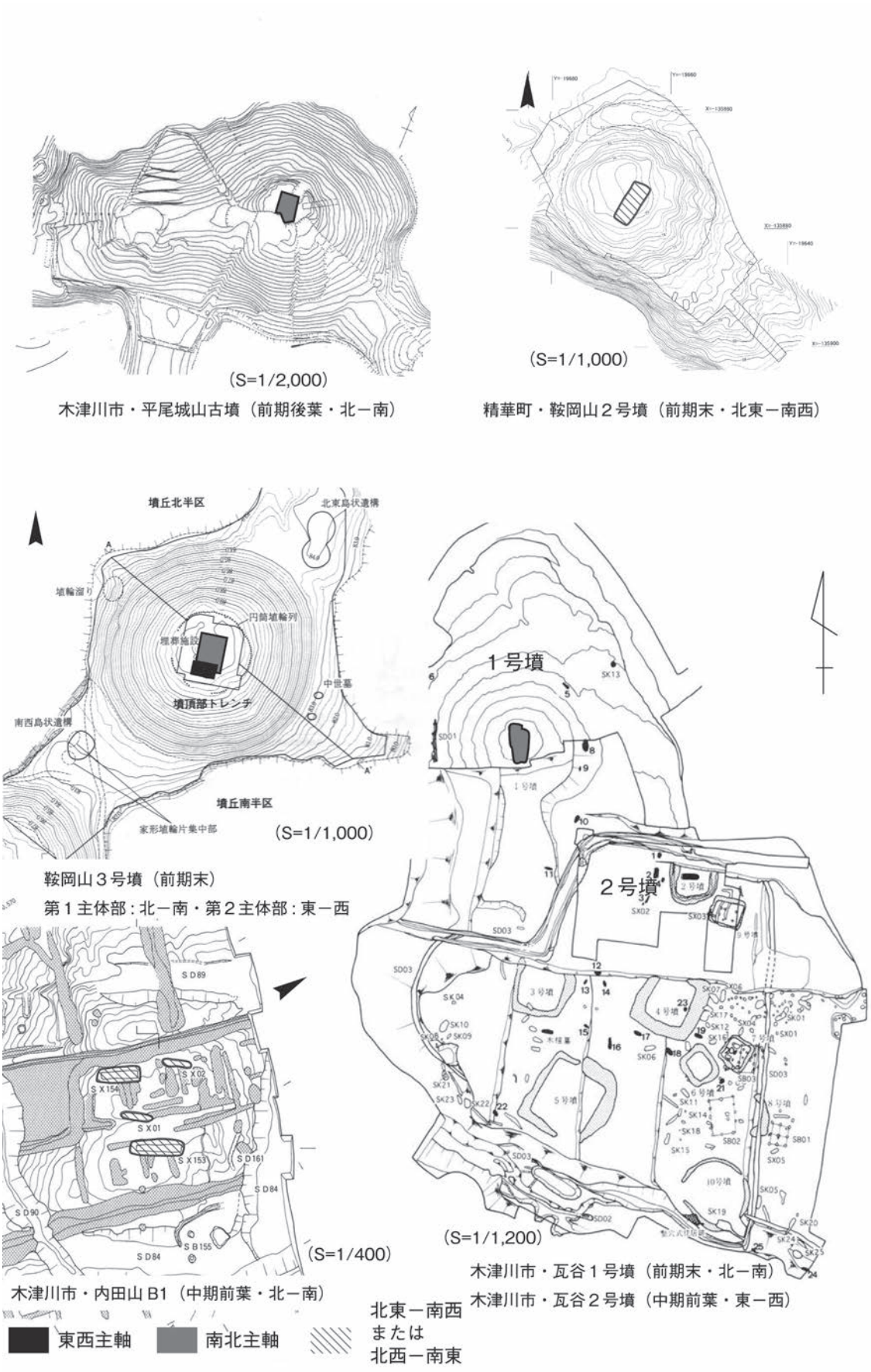
（２）北山城地域（第４図）

北山城地域では、前・中期古墳の調査事例が桂川右岸に位置する乙訓郡及び葛野郡に集中し、埋葬施設の実態が解明されている事例も同地域の比重が最も高い。その一方、北山城地域で最大規模の前方後円墳は宇治川右岸の黄金塚２号墳で、木津川、宇治川、桂川の合流地点の一帯に当時存在した巨椋池を舞台とする水運の要衝に造られた古墳と位置付けられる。

①乙訓郡及び葛野郡（京都市西京区・向日市・長岡京市・大山崎町）・桂川右岸

桂川右岸の乙訓郡で築造された首長墓群（乙訓古墳群）の嚆矢となるのが、向日丘陵で最初に築造された前期初頭の向日市五塚原古墳（91m前方後円墳、和田一期・広瀬１期）である。後円部中央で竪穴式石槨が検出されている。北－南を主軸とする墳丘の向きとはわずかに斜行するものの、北－南主軸と考えて問題のない角度である。桂川右岸では、五塚原古墳以降、前期中葉（和田二期・広瀬２期）の向日市元稲荷古墳（94m前方後方墳）、向日市寺戸大塚古墳（98m前方後円墳）、京都市一本松塚古墳（100m前方後円墳）まで継続して北－南主軸が採用される。

前期後葉（和田三期・広瀬３期）からは様相が変わり、前期後葉の向日市妙見山古墳（115m前方後円墳）では後円部・前方部埋葬施設が、いずれも東－西主軸を採用する。また、中期初頭の大



第３図　相楽郡（木津川右岸南部・左岸南部）の事例

山崎町鳥居前古墳（54m帆立貝形墳、和田五期・広瀬４期）も東－西主軸を採る。一方で北－南主軸も併存し、前期後葉の京都市百々池古墳（30m円墳）、前期末の長岡京市長法寺南原古墳（60m前方後方墳、和田四期・広瀬４期）の埋葬施設が挙げられる。

中期の埋葬施設は方位の不明な古墳が多いが、中期前葉の長岡京市カラネガ岳２号墳（36m帆立貝形墳）は北－南主軸である。参考までに、乙訓郡で最大規模の前方後円墳である長岡京市恵解山古墳（和田六期・広瀬５期）は後円部埋葬施設の方位が残念ながら不明であるが、前方部の鉄器埋納施設は北－南主軸となる。

②紀伊郡（京都市伏見区）・宇治川右岸

この地域では、前期中葉から前期末葉にかけて数基の首長墳が存在した[注15]とされるが、埋葬施設の実態はほとんどわかっていない。唯一、後円部埋葬施設の調査が実施されたのが前期末の黄金塚２号墳（140m前方後円墳、和田四期・広瀬４期）で、粘土槨と考えられる東－西主軸の埋葬施設が後円部中央部の立会調査[注16]で検出されている。

③小結

北山城地域の前・中期古墳まで埋葬施設が判明している事例はほとんどが桂川右岸の乙訓郡に集中し、前期中葉までは北－南主軸に限定されるが、前期後葉から中期初頭にかけては東－西主軸が一定存在するようになる。前期初頭から首長墓の造営が開始される向日丘陵を例にとると、最初の五塚原古墳以降、埋葬施設の北－南主軸が継続するが、前期後葉の妙見山古墳では東－西主軸が採用されている。たとえ同一系譜上の首長墳であっても、時期によって埋葬施設の主軸方位が変わっていたことを示す事例である。

また、宇治川右岸には、北山城地域の前期古墳で最大規模となる前期末の黄金塚２号墳が存在するが、この古墳も埋葬施設が東－西主軸となる。

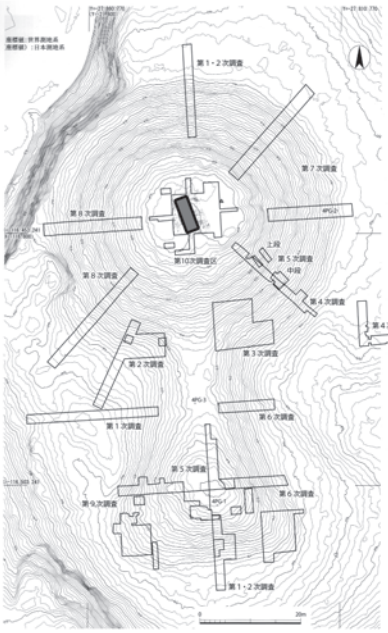
黄金塚２号墳と妙見山古墳は、前期後葉から前期末の北山城地域では他を圧する規模の前方後円墳であるが、この２古墳が東－西主軸を採用することは、一衣帯水の位置関係にある木津川左岸北部の綴喜古墳群との関係も想定できる現象である。

（３）南丹波地域（第５図）

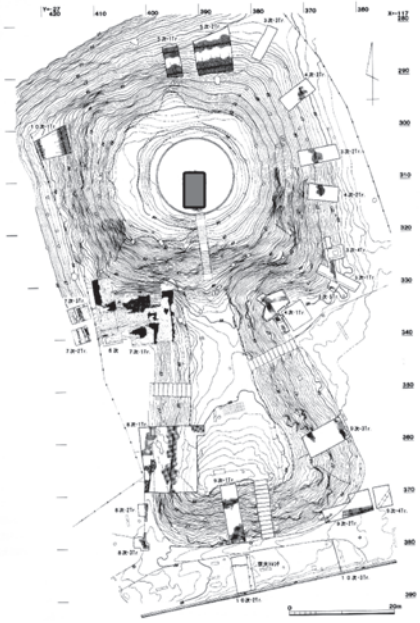
南丹波地域では、大型古墳で埋葬施設の詳細が判明している事例が限られるため、墳丘長20m級の古墳も含めて検討の対象とする。

①桑田郡・船井郡

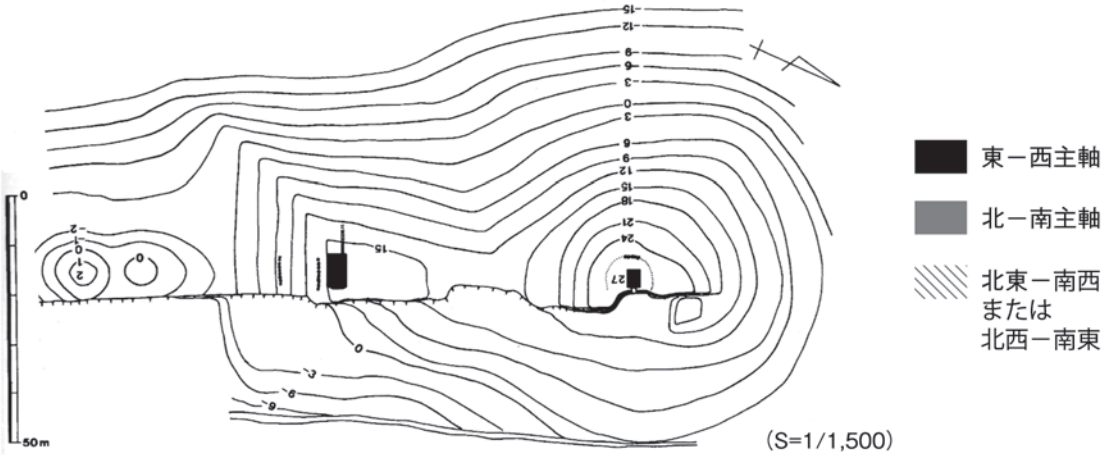
前期初頭以前まで遡る南丹市黒田古墳（52m前方後円墳または前方後円形墳墓）は、割竹形木棺直葬の中心埋葬施設（第１主体部）が検出され、北東－南西主軸を採る。第１主体部の埋没後に掘削された第２主体部は北－南主軸である。その後はしばらく小型墳が続くが、前期末の京丹波町蒲生野古墳（40m円墳か、和田四期・広瀬４期）では、北西－南東主軸の木棺直葬の埋葬施設が検出された。同時期の園部垣内古墳（82m前方後円墳）では東－西主軸の粘土槨が検出され、大量の遺物が出土している。また、これも同時期の京都市愛宕山古墳（20m方墳、和田四期・広瀬４期）では、割竹形木棺直葬の埋葬施設が検出されており、東－西主軸を採る。中期前葉の南丹市今林



向日市・五塚原古墳（前期初頭・北－南）

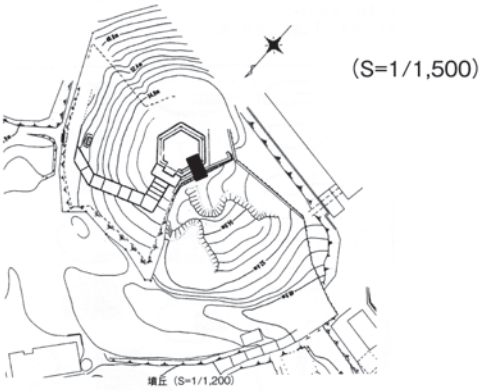


向日市・元稲荷古墳（前期中葉・北－南）



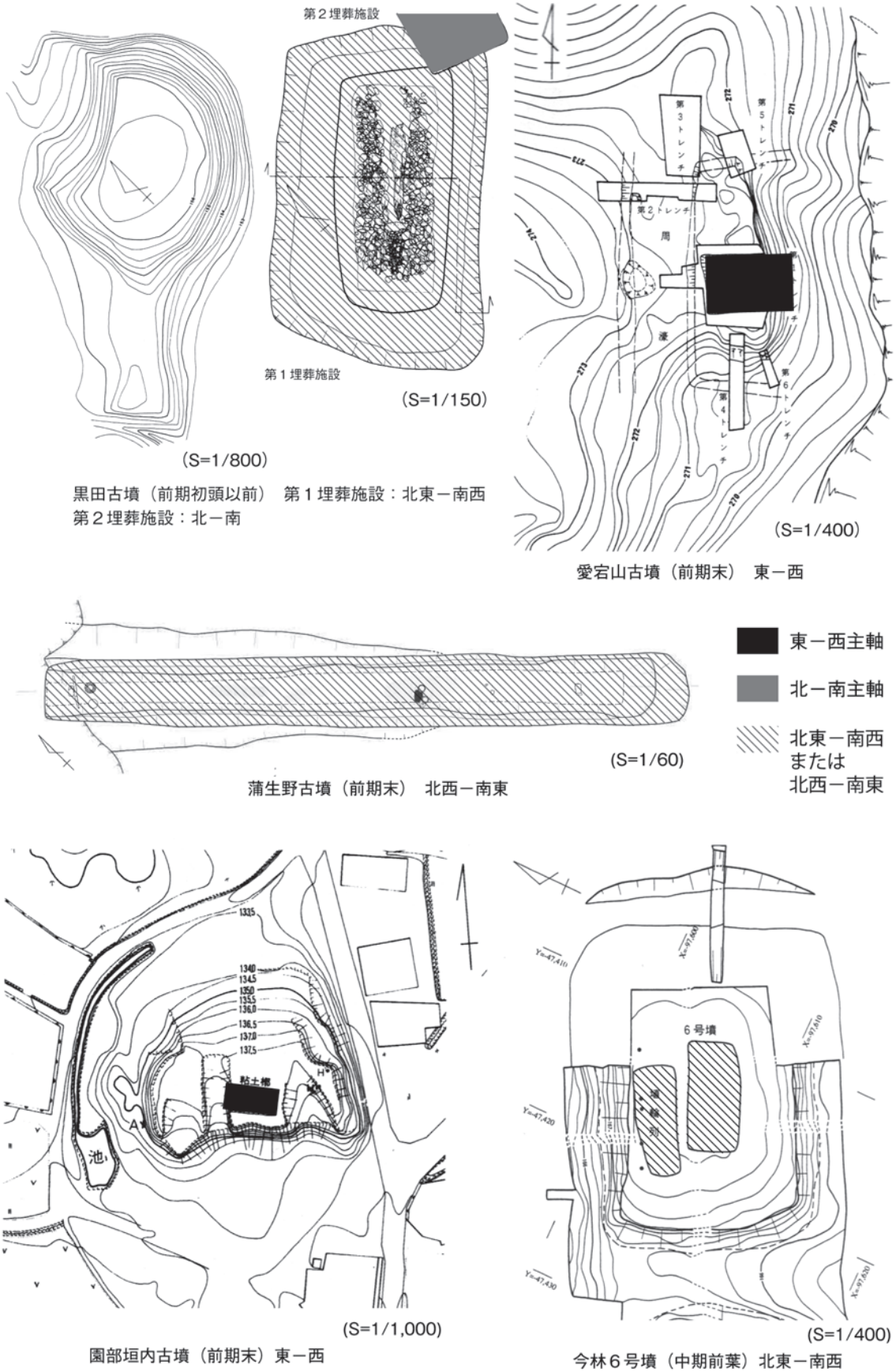
向日市・妙見山古墳（前期後葉・東－西）

大山崎町・鳥居前古墳（中期初・東－西）



京都市・黄金塚２号墳（前期末・東－西）

第４図　北山城地域(桂川右岸・宇治川右岸)の事例



第５図　南丹波地域の事例

６号墳(22m方墳、和田六期・広瀬５期)は北東－南西主軸である。

②小結

南丹波地域における前、中期古墳の埋葬施設主軸方位は、北東－南西、北西－南東、東－西、北－南という全ての区分が混在し、一貫した傾向は見出しにくい。こうした状況下で、この地域を代表する大型墳、園部垣内古墳の埋葬施設主軸が東－西主軸を採用することは示唆的である。南丹地域では、前期初頭以前の黒田古墳が北東－南西主軸であることから、少なくとも、東－西主軸はこの地域の伝統的な埋葬施設の方位ではない。(以下、次号)

(ふるかわ・たくみ＝京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係主査)

注１　古川 匠・桐井理揮・北山大熙ほか 2022『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会

注２　古川 匠 2022「綴喜古墳群の地域的特性」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会

注３　和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 巻第２号　考古学研究会

注４　広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社

注５　都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第 26 巻第３号　考古学研究会

注６　都出比呂志 2005「竪穴式石室の地域性の研究」『前方後円墳と社会』 塙書房（初出：都出比呂志 1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室 ）

注７　橋本達也 2000「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部

注８　福永伸哉 2007「前方後円墳成立期の東四国と近畿」『鳴門史学』21　鳴門史学会

注９　森田克行 2006「今城塚古墳と三島古墳群　摂津・淀川北岸の真の継体陵』同成社

注 10　北條芳隆 2017『古墳の方位と太陽』同成社

注 11　下垣仁志 2021「男山古墳群の動向」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』季刊考古学別冊 34　雄山閣

注 12　前掲注 11 と同じ

注 13　桐井理揮・北山大熙 2022「八幡西車塚古墳出土埴輪の再整理と編年的位置づけ」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会

注 14　前掲注 13 と同じ

注 15　和田晴吾・下垣仁志ほか 2017『畿内の首長墳』立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻

注 16　戸原純一・笠野 毅 1976「巨幡墓の境界線崩壊防止工事の立会調査」『書陵部紀要』第 27 号　宮内庁書陵部

研究ノート

木津川水運と東四国

桐井理揮

1．はじめに

令和３年度、『綴喜古墳群』の調査報告書が刊行された[注1]。綴喜古墳群は、これまで個別の古墳あるいは古墳群として認識されてきた八幡・京田辺市域の古墳群について、歴史的な一体性を認め、新たに古墳群として一括して再評価したものであった。

報告書の中では綴喜古墳群について、古墳時代前期後半から中期初頭にかけて極めて短い期間に中・大型古墳が相次いで築造されたことが示され、その背景として木津川水運を基盤とする首長の墓域であることが想定された。その具体的な事例を挙げると、八幡茶臼山古墳の阿蘇溶結凝灰岩製の石棺、ヒル塚古墳の舶載とみられる鉄剣などがあり、八幡西車塚古墳や大住南塚古墳の石室では猪名川流域産とみられる石英斑岩が使用されていることが明らかとなっている。他方、報告書では古墳築造の母体となった集落遺跡における外来的要素の分析を行うことはできなかった。本論では、外来系土器、特に東四国地域からの搬入土器に注目し、その集成をもとに若干の考察を行うことによって木津川水運の一端を明らかにしたい。

2．弥生・古墳時代の木津川水運

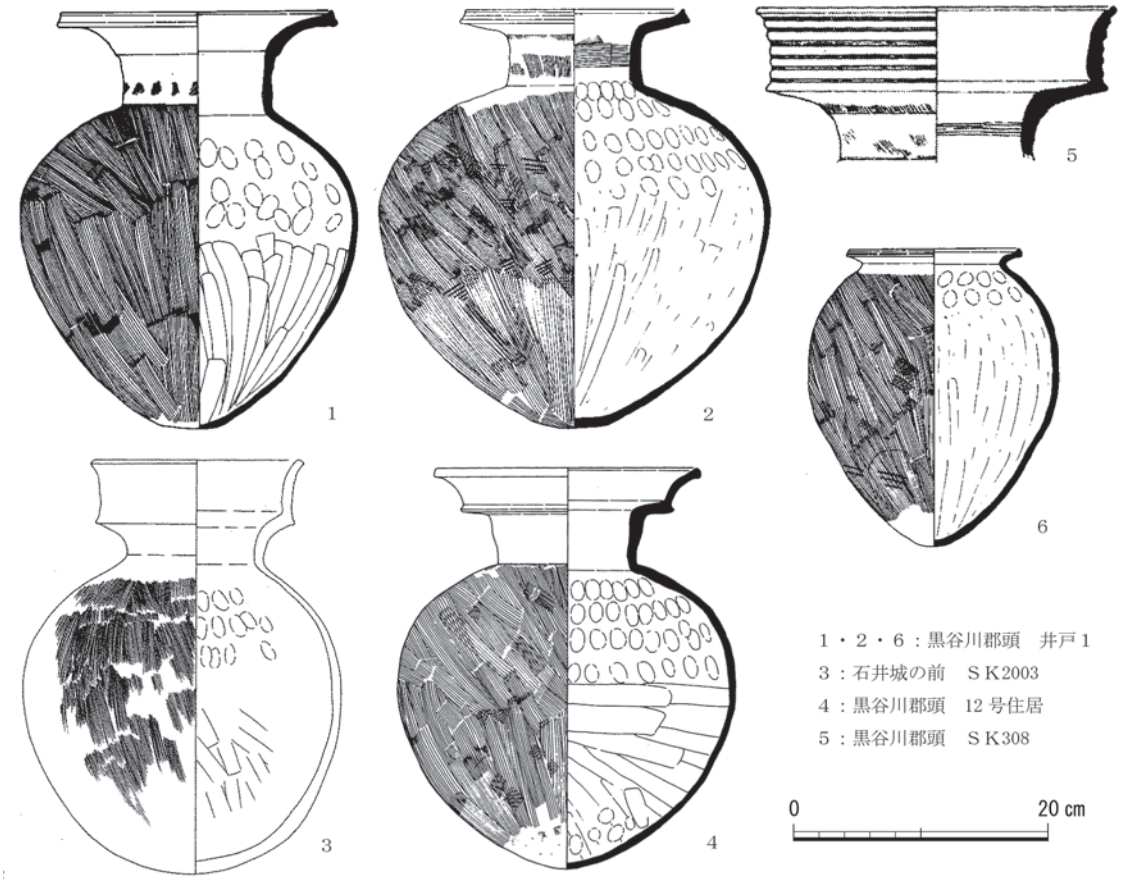
2000年代以降、京都府南部では低地部の大規模調査が相次ぎ、弥生時代終末期から古墳時代前期の地域の状況が明らかになりつつある。佐山遺跡や内里八丁遺跡で居住域やそれに付属する生産域が検出され、巨椋池南岸における他地域系土器が多出する遺跡の様相が明らかとなった。新名神高速道路建設に伴う発掘調査では、下水主遺跡で大規模な護岸を伴う川津とみられる遺構が検出されている。下水主遺跡では一定数の外来系土器も出土しており、木津川流域における河川交流の拠点と評価された。高野陽子はこれらの遺跡から出土した外来系土器の様相を地域ごとに整理し、弥生時代後期後葉～庄内式古段階にいち早く東海系土器が認められるようになり、瀬戸内地域を介さず､東海と大和をつなぐルートとして木津川水運が機能したと指摘する[注2]。そして、瀬戸内系土器については、庄内式新段階以降、布留式古段階まで搬入が認められるとする。

古墳出現期における淀川・木津川を介した交流ルートの重要性は、青銅鏡や埋葬施設の頭位、あるいは石室・石棺石材の分布から検討されてきた。これまでの研究史で注目されてきたのは、特に阿波を含む東四国との関係であった[注3]。特に、吉野川流域で産出する結晶片岩の共有は、両地域間の首長間の直接的交流を端的に示す要素といえよう。

３．京都府内における東四国系土器

（１）東四国系土器について

前節までを踏まえ、本論では基礎的な作業として府内出土の東四国系土器の出土状況を整理することにしよう。香東川下流域産（下川津Ｂ類）土器群は香川県北東部の香東川下流域で、吉野川下流域産土器は徳島県東部の吉野川下流域で集中的に生産されたとみられている土器群である。器種を越えて胴部内面の指頭圧痕が認められ、口縁部には強い横ナデが施される。口縁端部はわずかに肥厚するか、上方に拡張するものが多い（第１図）[注4]。東阿波型土器は香東川下流域における土器生産体制から分化して成立した土器群と考えられており、図面上では両者を明確に分別することが難しい場合もあるが、香東川下流域産土器は焼き上がりが暗褐色で胎土に角閃石の小粒を多く含むのに対し、東阿波型土器は焼き上がりが赤褐色で、胎土には片岩を含むという特徴がある[注5]。この２系統の土器群を合わせ、東四国系土器群と呼称する。東四国系土器は各地で集成が行われ、ある程度の動向を把握することが可能である[注6]。他方、京都府下では出土数が寡少であまり注目されてこなかった。本論では、基礎的な作業として、東四国系土器の集成を行う。両者は峻別が難しい場合もあるが、その場合は一括して東四国系として提示することとしよう。なお、大形の複合口縁壺については、生駒山西麓産のものと峻別が難しい場合も多く、本論の対象から除外している。



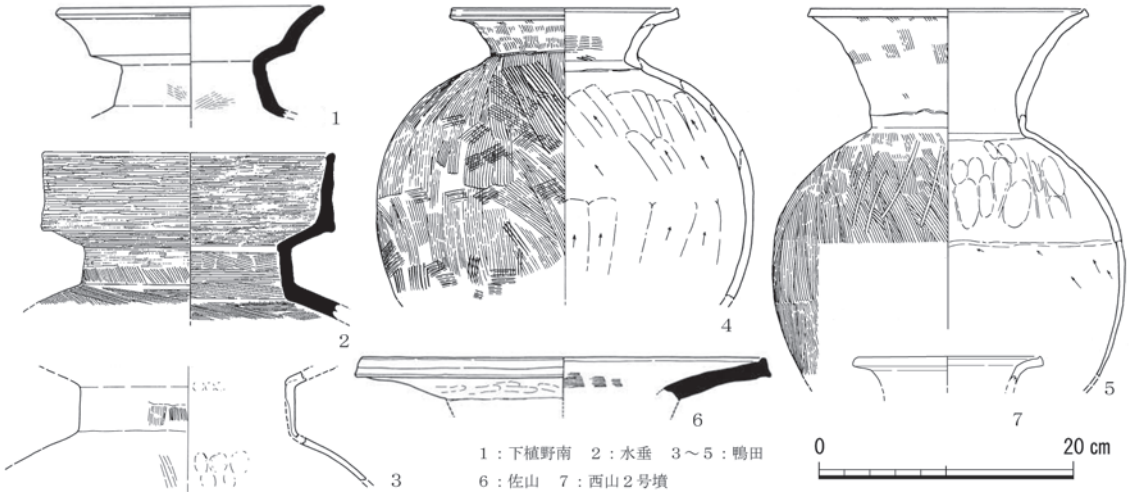
第１図　東阿波型土器の諸例（１／６）

（２）京都府内の出土状況

乙訓では、鴨田遺跡[注7]と松田遺跡[注8]、下植野南遺跡[注9]の３遺跡で東阿波型の二重口縁壺が出土している（第３図９～12）。鴨田遺跡の２点は溝資料だが布留式古段階の土器と共伴している。下植野南遺跡の二重口縁壺（第２図１）は中部瀬戸内系の可能性もあるが一応掲載した。水垂遺跡[注10]では壺類が少なくとも８点認められ、２次口縁部が直立して立ち上がるタイプ（第３図１～６）が多い。生駒山西麓産として報告された壺類（第３図３～５）は、香東川下流域産とみて大過ないだろう。広口壺（第３図７）は内面の指圧痕や口縁端部調整の所作が東四国系と類似するが、胎土の特徴から、変容品の可能性が高い。初期須恵器が共伴する。第３図８の二重口縁壺は東四国で通有のものと比較すると口縁部が伸長気味だが、胎土中に片岩とみられる砂粒を含んでおり、吉野川下流域からの搬入品と考えておく。水垂遺跡では庄内式中段階を中心とする土器が伴っているが、東阿波の編年ではⅥ期から古Ⅰ－２までの時間幅を含む。

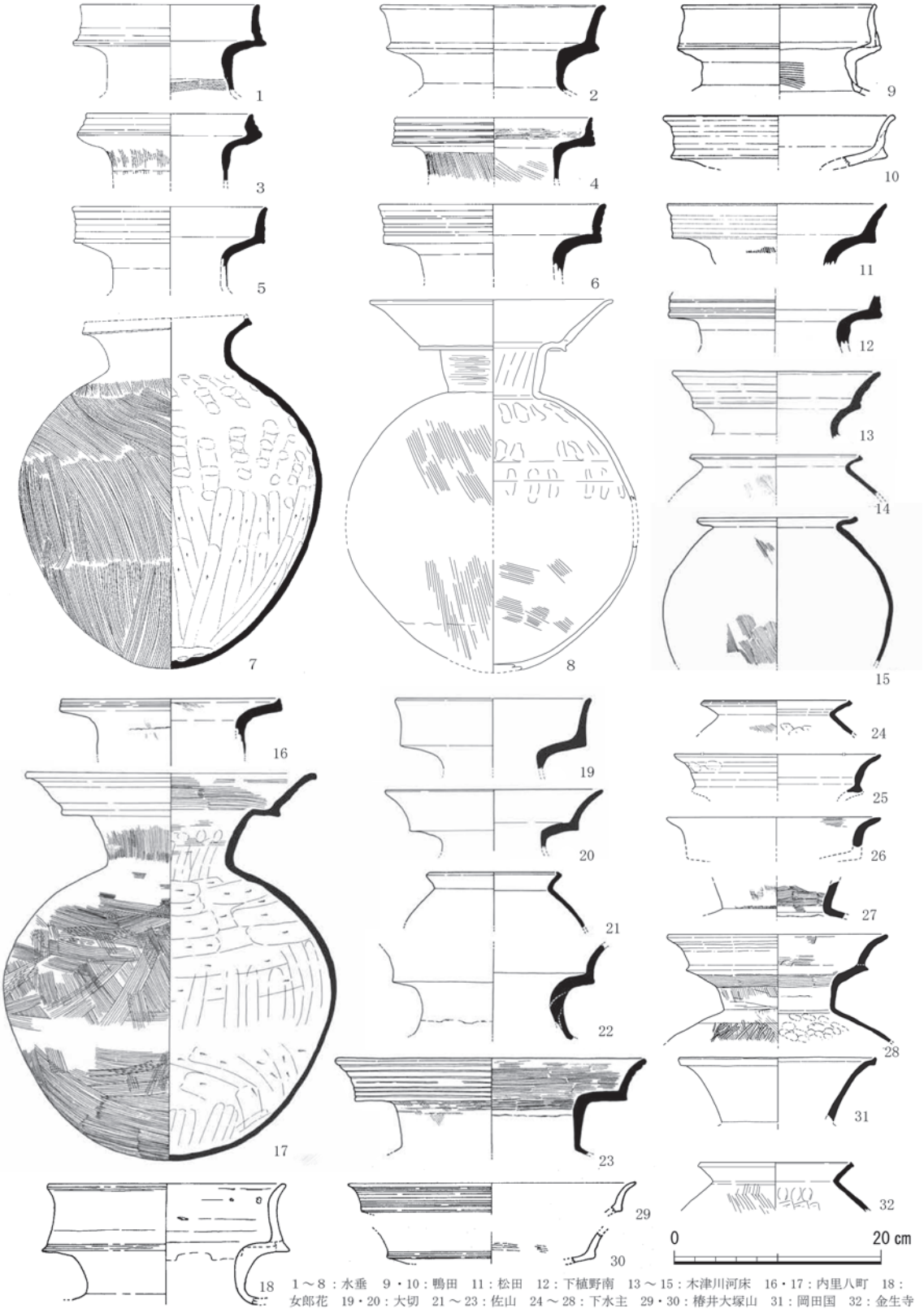
木津川左岸では木津川河床遺跡[注11]で壺と甕２点を確認している。甕２点はⅥ期とやや古相のものか。内里八丁遺跡[注12]の広口壺と二重口縁壺（第３図16・17）は、いずれも胎土には角閃石を含んでおらず吉野川下流域産と考える。布留式古段階から中段階の土器が共伴する。女郎花遺跡[注13]は八幡西車塚古墳に近接する遺跡で、Ⅱ期の埴輪も出土していることから八幡西車塚古墳に関連する遺跡と考えられる。布留式中～新段階の溝から胎土に片岩を含む東阿波型の複合口縁壺（第３図18）が出土している。大切遺跡[注14]でも東阿波型と考えられる二重口縁壺が２点（第３図19・20）出土している。遺跡の全体像は明らかではないが、近江・東海系土器がまとまって検出されており、今後調査が進展すれば木津川左岸における河川交流拠点と評価できるかもしれない。

木津川右岸域では、佐山遺跡[注15]、下水主遺跡[注16]で東阿波型の甕および二重口縁壺が出土している（第３図21～28）。両遺跡とも多くの地域からの外来系土器が出土しているが、東海系土器が中心で、瀬戸内系土器は量的には少ない。確実な香東川下流域産は広口壺（第２図６）が認められるのみである。西山２号墳墳裾で出土した口縁部の小片（第２図７）は、東四国系の可能性があるが[注17]、胎土中に片岩や角閃石を含まず、評価は保留しておく。



第２図　京都府出土の香東川下流域産土器（１／６）

木津地域では、椿井大塚山古墳(注18)と岡田国遺跡(注19)で壺が出土している。椿井大塚山古墳では後円部出土土器の中に東阿波型の二重口縁壺とみられる土器が図示されている(第３図29・30)。実見することができていないが、「口縁部外面に浅い多条沈線状の筋がみられる」という特徴から、搬



1～8：水垂　9・10：鴨田　11：松田　12：下植野南　13～15：木津川河床　16・17：内里八町　18：女郎花　19・20：大切　21～23：佐山　24～28：下水主　29・30：椿井大塚山　31：岡田国　32：金生寺

第３図　京都府出土の東阿波型土器（１／６）

入品と考えられる。岡田国遺跡では直口壺（第３図31）１点が東阿波型と指摘されているが、故地での類例は少なく、変容品か。

巨椋池周辺および木津川流域以外での出土例は寡少で、金生寺遺跡[注20]に限られる（第３図32）。亀岡盆地南端に位置するこの遺跡では布留式中から新段階の水利施設が検出されており、東阿波型の甕を少なくとも２点確認している。摂津山間部の倉垣遺跡でも布留式中段階の東阿波型甕が出土しており、猪名川上流域から亀岡盆地へのルートを示す事例として注目される。

４．小結

府内出土の東四国系土器を概観した。傾向をまとめておくと以下のようになる。

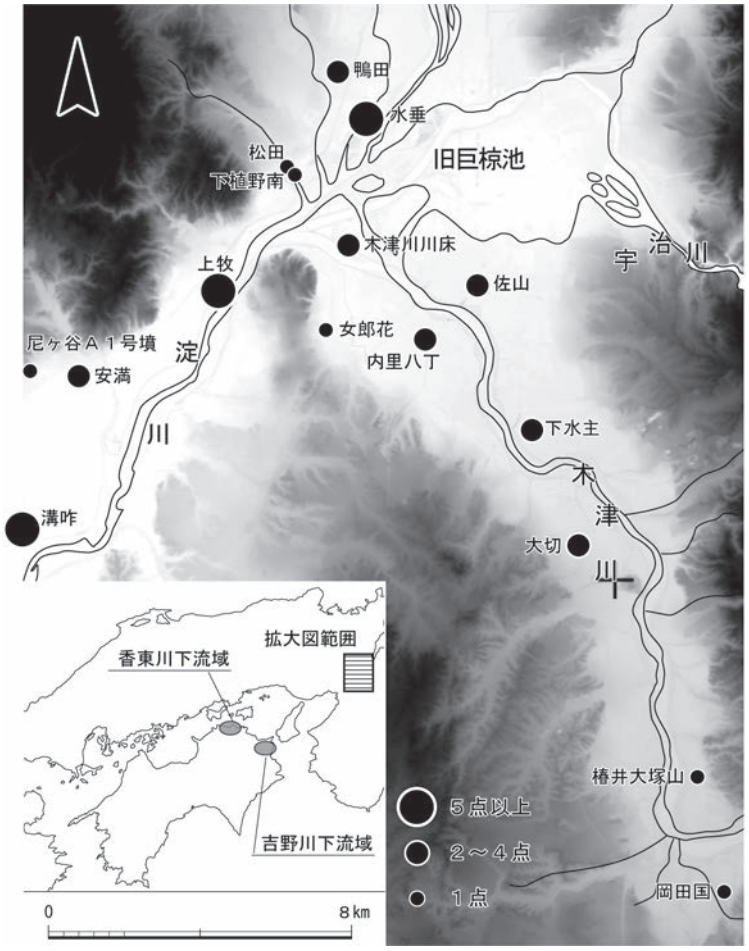
１．分布は、巨椋池周辺および木津川流域にほぼ限定される。香東川下流域産よりも吉野川下流域産が圧倒的に多く、特に巨椋池周辺から八幡市域では集中が認められる。

２．搬入時期は巨椋池周辺で庄内式中段階並行のものがある以外は、庄内式新段階～布留式古段階が中心である。八幡市域では布留式中段階に下るものが散見される。

３．器種は、甕が散見される程度で、多くは壺類である。

淀川右岸では、猪名川下流域の遺跡群をはじめ、安満遺跡、溝咋遺跡、上牧遺跡と拠点的に東阿波型土器が搬入されており、木津川流域でも同様の傾向が認められることが明らかとなった。吉備からの搬入品が少ないこととは対照的な状況である。尼ヶ谷Ａ１号墳や椿井大塚山古墳で東阿波系土器が認められることや、綴喜古墳群の埋葬施設が東西頭位を志向するなど、古墳にも東四国と共通する要素が認められることも看過できない。これまで木津川は流域は瀬戸内から大和へ至るルート上の中継地として捉えられていたが、巨椋池南・西岸については、両地域間のより直接的な交流関係を想定できるのかもしれない。今回の基礎的な作業を踏まえて周辺地域との比較・検討を行うことで、当地域の古墳群の意義はより明瞭になろう。

（きりい・りき＝京都府教育庁指導部文化財保護課主任）



第４図　木津川・淀川流域の東四国系土器出土遺跡

注１　古川 匠編 2022『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会

注２　高野陽子 2021「外来系土器にみる初期古墳の成立基盤―城陽市芝ヶ原古墳築造の背景－」『京都府埋蔵文化財情報』第 139 号　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注３　森田克行 2006『今城塚古墳と三島古墳群』同成社／福永信哉 2007「前方後円墳成立期の東四国と畿内」『鳴門史学』第 21 集　鳴門史学会

注４　第１図の出典は以下の通り。菅原康夫編 1987『黒谷川郡頭遺跡』Ⅱ　徳島県教育委員会／大西浩正編 1990『黒谷川郡頭遺跡』Ⅴ　徳島県教育委員会／日下正剛編 1999『石井城ノ前遺跡　石井・神山線地区』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 23 集　徳島県埋蔵文化財センター

注５　菅原康雄 1987「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『同志社大学考古学シリーズ』Ⅲ考古学と地域文化　同志社大学考古学シリーズ刊行会／大久保哲也 2006「讃岐および周辺地域の前方後円墳成立期の土器様相」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター／菅原康夫 2000「下川津Ｂ類土器と東阿波型土器」『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社／菅原康夫 2006「阿波の集落と初期古墳」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム６　二上山博物館

注６　岩崎直也 1984「四国系土器の搬出」『大阪文化誌』17　（財）大阪府文化財センター／栗林誠治 2004「四国島出土の東阿波型土器」『真珠』第４号　徳島県埋蔵文化財研究会／山田隆一 2006「大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム６　二上山博物館／川部浩司「古墳時代開始期における大和地域と四国北東部地域の地域間交流」『研究紀要』第 16 集　（財）由良大和古代文化研究協会

注７　國下多美樹ほか 1994『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 39 集　（財）向日市埋蔵文化財センター／山中 章・松崎俊郎編 1985『鴨田遺跡』向日市教育委員会

注８　林 亨編 1984『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第４集　大山崎町教育委員会

注９　石井清司ほか編 2006『京都府遺跡調査報告書』第 36 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 10　木下保明ほか編 1999『水垂遺跡・長岡京左京六・七条三坊』（財）京都市埋蔵文化財研究所（図３－８は観察の上実測図を改変トレース）

注 11　黒坪一樹 1984「木津川河床遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 11 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター／岩松 保 1986「木津川河床遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 19 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 12　引原茂治 2003「内里八丁遺跡第 19 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 109 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター／竹原一彦ほか 1999『京都府遺跡調査報告書』第 26 冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 13　八十島豊成編 1999『女郎花遺跡第３・５次発掘調査概報』八幡市教育委員会

注 14　有井広幸 1993「大切遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 53 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 15　筒井崇史ほか 2018『京都府遺跡調査報告集』第 173 集　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 16　奥村清一郎ほか 2003『京都府遺跡調査報告書』第 33 冊　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 17　桐井理揮ほか 2020「西山１・２号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館報』第 23 号　同志社大学歴史資料館

注 18　中島 正編 1999『椿井大塚山古墳』山城町埋蔵文化財調査報告書第 21 集　山城町教育委員会

注 19　福山博章ほか 2020『京都府遺跡調査報告集』第 180 集　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注 20　桐井理揮 2020「金生寺遺跡５・７次」『京都府埋蔵文化財情報』138 号　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

研究ノート

平安京左京一条三坊三町の近世町家遺構について

加藤雄太

１．はじめに

本稿では2018年から2020年にかけて調査が行なわれ、2021年8月に刊行された平安京（左京一条三坊三町）発掘調査報告の成果から取り上げきれなかった江戸後期の町家跡と漆喰遺構について紹介する。調査地は平安時代以降、近衛大路の路面にあたり、調査地北側で近世の出水通り（旧近衛大路）が見つかっている。江戸時代には町家が立ち並んだが、嘉永７（1854）年の嘉永の大火にて焼亡し、京都守護職の上屋敷が設置される。慶應３（1867）年に守護職が廃止され、明治２（1869）年に京都府庁が、同４年に京都中学校、同18年に再び京都府庁の地となり、現在にいたっている。

第１図　調査地周辺
（Ｓ＝1/10,000）

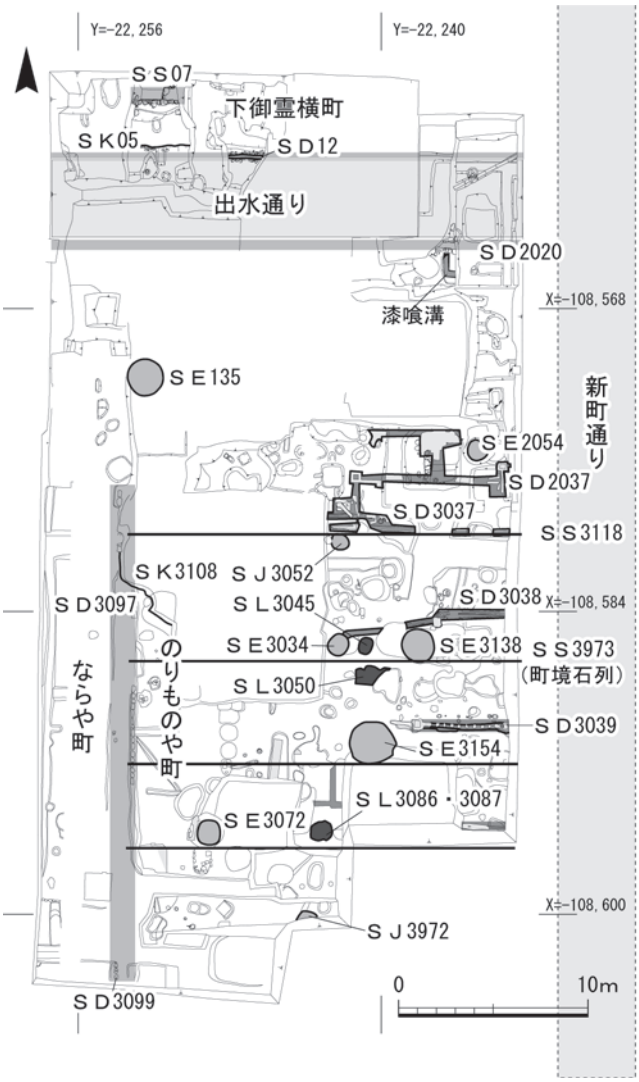
２．調査地の概略

当調査地では、嘉永の大火（1854年）、天明の大火（1788年）の火災層を確認しており、このうち嘉永の大火の焼土下から漆喰の遺構を確認した。報告書では簡易な報告にとどまっていたが、本論では、情報137号にて報告した西洞院辻の調査で見つかった漆喰遺構の事例を踏まえ、当地の町家の復元を試みる。まずは、本調査でみつかった町家の遺構について概観したい。第２図は調査地の近代から江戸時代後期の遺構を検出した第一面のうち、天明の大火から復興し、嘉永の大火にて焼亡するまでの江戸時代後期段階の遺構を示した図である。調査地外の東側には新町通り、調査地内北側に出水（近衛）通りが通る。また調査地西端には町境（ＳＤ3097・3099）の溝が見つかっている。

本調査で確認できた町家は出水通りと新町通りに面している。そのうち残存状況が比較的良好な町家が新町通りに面していることから、調査地内の東部の新町通りに面する町家を検討対象とした。漆喰溝（暗渠）に関しては、調査地北東部の出水通りの道路側溝であるＳＤ2020に接続する暗渠がある。このＳＤ2020の事例を踏まえ、本調査でみつかった他の６条の新町通りに流れる漆喰暗渠は家々の面する「新町通りの側溝」に排水する設備であるとした。報告書ではこの暗渠の本数から１軒が出水通りに面し、５軒が新町通りに面するとしていた。このほかＳＬ3050などのカマド３基、用水を供給した石組み井戸５基（SE135やSE2054等）、貯水用と考えられる石組遺構を1基（ＳＥ3034）、便槽を２基（ＳＪ3052、ＳＪ3972）と町家の遺構を確認した。これらの町家はＳＤ3097・3099といった背割り溝により、新町通りより１本西に位置する釜座通りに面する町家と

区画されている。今回報告するのは背割り溝東側の「のりものや町」である。背割り溝ＳＤ3097の東側、町家の裏手にあたる空間ではＳＫ3108やＳＫ3114といった大型の廃棄土坑を検出している。これらの廃棄土坑からは、嘉永の大火後の処理に伴って捨てられた遺物が多量に出土している。

第２図は報告書に掲載した図である。図示した範囲で新町通りに続く東西軸の漆喰暗渠は６本確認できるが、これらすべては併存していたのではなく、溝部分の修繕に伴う付け替えや、町家の建て替えに伴う移設など変遷があると考えられる。第３図に示した漆喰遺構の西側（図左下）が顕著である。このほかＳＤ3038では溝の付け替えと、一度修繕した痕跡が確認できる。



第２図　調査地平面図

３．その他の事例

西洞院辻の例は後述するが、のりものや町以外の調査でも漆喰遺構は見つかっている。あまり多くはないが、貴重な事例であるので紹介したい。『平安京左京六条三坊五町跡』（(財)京都市埋蔵文化財研究所2005）の調査では19世紀代の町家から、漆喰組み溝・桝・槽が報告された。溝は炉の施設からの排水目的の設備で、桝は溝の接続部にあり、現在のコンクリート桝と同じ役割、槽は水溜施設であると報告されている。このほか井戸や埋甕、穴蔵、土間、礎石列が見つかっている。『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』（(公財)京都市埋蔵文化財研究所2016）では江戸末から明治の漆喰のタタキと溝が見つかっている。井戸に付随する水利施設で東側の通りに流れていたと思われる。『寺町旧域・御土居跡』（(公財)京都市埋蔵文化財研究所2016）は高辻家敷地内の元治の大火（1864年）から1877年の番組小学校設置までの間に機能したと考えられる遺構を報告している。かまどと近接する漆喰溝は五右衛門風呂の可能性が指摘され、このほか漆喰で接着した石組溝や漆喰の池、漆喰槽が報告されている。同志社大学の致遠館地点の調査では武家の与力・同心屋敷が調査され、18世紀から19世紀の遺構が報告された。調査地北側の石組溝から漆喰溝で井戸まで水を取り込み、さらに漆喰溝で池に水を注ぎ込んでいたと報告している。「平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡」（(株)文化財サービス2022）の調査では

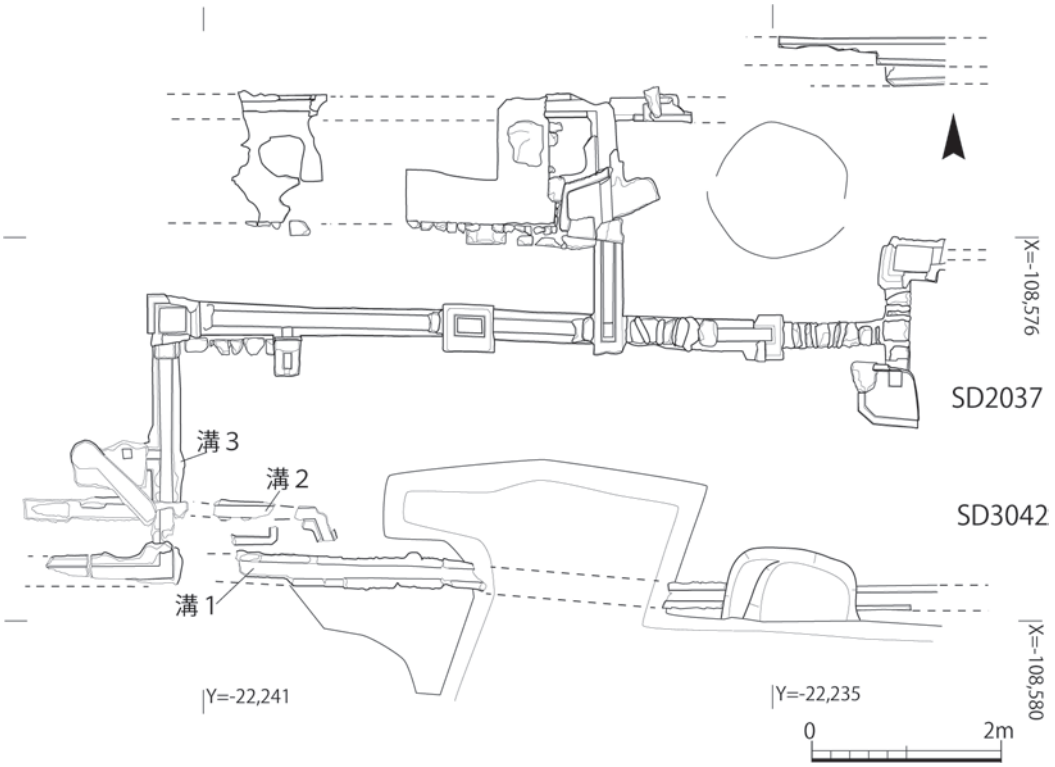
西洞院通り西側に面する町家が調査され、調査地中央に漆喰張りの池と、東側に西から東に水を流す漆喰の暗渠と桝が報告されている。

このようにおよそ19世紀には公家、武家、町人の隔たりなく漆喰を用いた水利の基礎工事を行っていたことが看取できる。なかでも今回報告する漆喰遺構は大規模であり、良好な残存状況であった。また、報告書によって、漆喰の「溝」と「暗渠」と表現が異なっているが、これは遺構検出時の判断により呼び分けたもので、いずれも本来は「暗渠」であったと考えている。

写真１　漆喰遺構（ＳＤ2037・ＳＤ3037）（南から）

４．漆喰遺構について

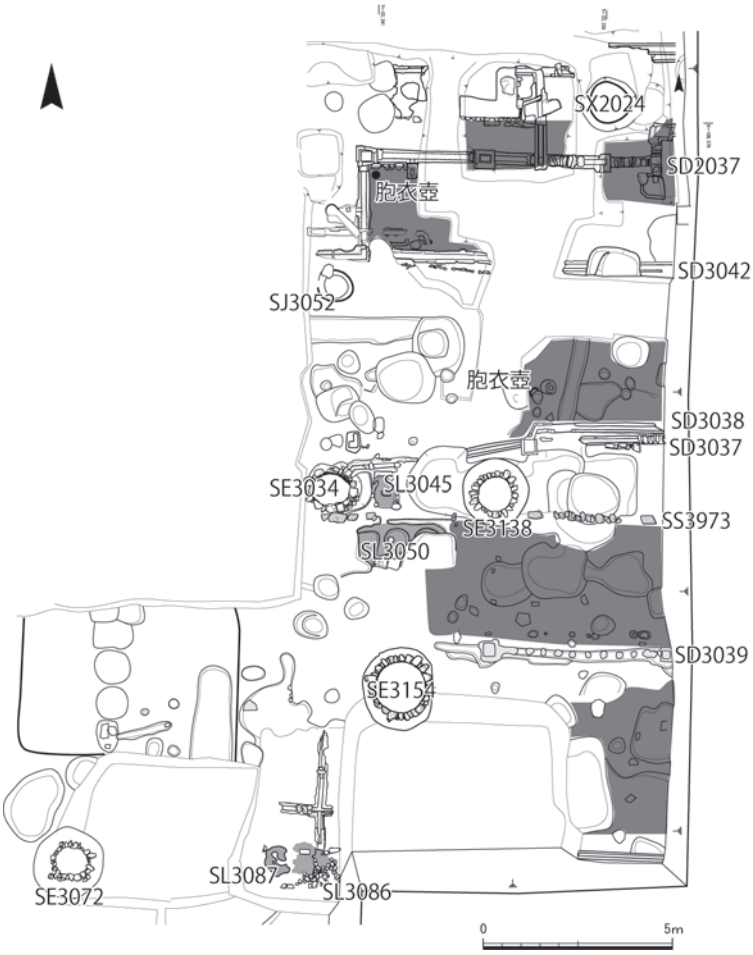
写真１は調査地東部のＳＤ2037とその周辺を撮影したものである。漆喰の溝（暗渠）が東西軸に



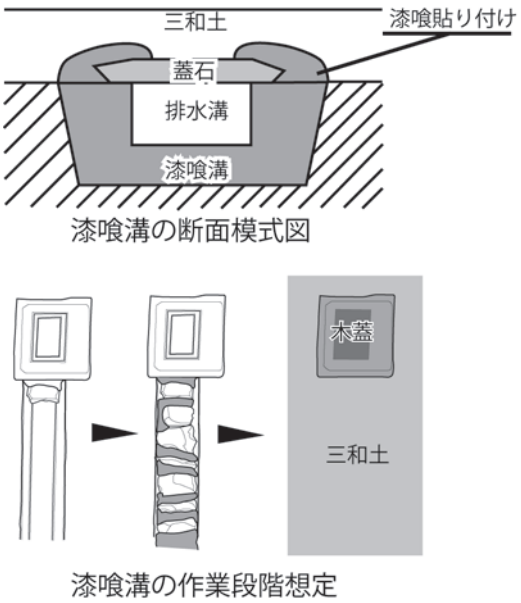
第３図　漆喰遺構

はしり、屈曲して南や北に続く様子がわかる。漆喰溝は多くが開口しているが、元々は暗渠であった（第５図）。暗渠の西側屈曲部などに方形の桝が確認できるほか、暗渠とは異なる構造が確認できる。このほか平面に張り付けた漆喰の床状遺構や縁を設けた構造がみつかっている。それぞれ個別の構造について説明する。

第３図は写真１に映っている漆喰遺構を図化したものである。ここでは西側にみえる漆喰溝（暗渠）の前後（修築）関係について確認しておきたい。図中の溝に番号を付しているが、これが埋設された順序である。溝１として示した漆喰溝が最初に施工され、その後、溝２が溝１に接続する構造で増設され、最後これらを放棄し、溝３を埋設したことが漆喰溝の上下関係から判断できる。これらの溝がどの程度の期間使用されたのか判断を下すのは難しいが、溝１～３はその下層に天明の大火（1788年）に伴う廃棄遺物や焼土が確認できる。そして溝３の接続する排水桝が被熱していることから嘉永の大火（1854年）に罹災し廃棄されたと考えられる。以上のことから66年間の間に三度の修築がなされたと言えそうである。



第４図　検討範囲（Ｓ＝１／200）



第５図　漆喰溝の復元模式図

第４図では、今回の報告で検討する範囲を示した。トーン掛けしている範囲は焼土が良好に堆積している範囲である。家屋が燃えることにより高温化し焼土が生じたと考えれば、良好な焼土が残る範囲は、燃料となる家具など木材が多い座敷空間であったと考えられる。この他、生活に必要な水を調達した井戸、屋敷間の境に並べられた石列、粘土を張り付けで造成したかまど、便槽として設置された埋め甕、そのほか胞衣壺なども示

写真２　漆喰桝（北西から）

写真３　暗渠・開口溝・流し場（南から）

写真４　排水口と暗渠（南から）

写真５　排水口に伴う開口部と暗渠（南から）

しているとおりである。ＳＥ3034は漆喰溝が接続する石組遺構である。他の井戸と比べて浅く掘ってつくられていることから、貯水施設ではないかと考えている。生活用水を流していたのではないか。なお、この遺構からは便槽として使用されていた埋め甕が出土しており、町家廃絶時に近くにあった便槽をつぶし、投棄したと考えられる。便槽は西側にあったと思われるが、攪乱により確認できない。

第５図は漆喰遺構の模式図である。上段では暗渠の断面を示した。漆喰渠暗は任意の深さと幅で掘削された溝に直接漆喰を充てる現場打ちで作られている。漆喰溝の上には、河原石や薄く砕いた石を蓋として並べており、これを漆喰で接着し、固めている。三和土はこの上に敷かれていた。第５図下段は溝（暗渠）を俯瞰した図である。左から漆喰溝施工時、蓋石設置・漆喰による固定時、完成・機能時である。暗渠は桝の開口部あたりの高さまで三和土を敷いている。桝は開口部の内側に引っ掛かりの溝を設けこれに合う木蓋を被せる。枡は使用する間堆積する泥等を除去するために都度掃除されたとみえる。枡は被熱し、溝は被熱していない。このことから桝は火を受ける状態で機能していたことと、溝は暗渠であるため熱を受けていないと言える。木蓋は、調査時に炭化した蓋が溝に残存し、また枡底に一部が落ちていたことから設けられていたと想定した。

写真２は第３図東部に位置する漆喰桝である。写真奥暗渠より水が流れ込み、一定水量が溜ま

写真６　漆喰の流し場（東から）

写真７　（流し場と暗渠・漆喰床（南東から）

ると、東側に排水された。いわゆる沈泥槽の役割を果たしていたと考えられる。暗渠は石が蓋となって、土を被せて埋設されているが、桝はこれよりも開口部が上にある。町家機能時に開口しており、生活排水に混ざる泥などをさらう設備であったのだろう。写真でもわかるように桝の縁には段が設けられており、第５図で示したように、木蓋を置いていたと考えられる。

写真３は第３図中央を南より撮影したもの。東西にのびる暗渠は、一部を欠くが、残存し、中途に開口部が設けられている。小口の開口部も、南北にのびる開口部も、ともに桝のような沈泥槽と似た構造ではない。いずれも開口部の内側に段が設けられ、炭化した板材が残っていたことから、木蓋を置いていたと考えられる。また、写真中央東西にならぶ石列は屋敷地の境を示す石列であろう。写真手前の暗渠の南に位置する石は屋敷内の「ハシリ」と「ザシキ」空間の床の境を示す石か。

写真４は写真３よりやや西に位置する構造物である。暗渠の溝に接続する。写真左の石列は後述する理由から「ハシリ」と床の境を示すと考えられる。石列内側には胞衣壺が据えられていたが、三和土はない。胞衣壺は土間と床下いずれにも埋める風習があるが、この町家の暗渠や石列北側に見られた三和土が石列内側にないこと、石列は北に面を持っていることから壺は床下に埋められたと考えた。石列内側には三和土などは見られず、これらを踏まえて石列北を「ハシリ」南を「ザシキ」とした。開口部は段を設けておらず、南側にU字の浅い溝を作出しており、南から水を暗渠に流せる構造である。どのように使用したかは不明である。床下に位置する設備と思われるが、暗渠の境に並ぶ石列がこの漆喰遺構を避けて据えられているので同時に施工されたと考えられる。

写真５は写真３の東側の暗渠と開口溝である。溝は前述したように石を並べて漆喰で接着し、その上を三和土で覆っていた。開口部は西側半分を欠くが、写真３に写る小口の開口部同様に内側に段が設けられ、木蓋を置いていたと考えられるが、南側に溝の上半が開口している。写真４の構造物に似た設備があったようである。この溝の底に瓦を割って用いている。

写真６は写真２の南側に位置する流し場と思われる遺構である。開口部は暗渠に接続している。漆喰で「堰」を作出し、西側の一部に石を据えている。石や「堰」の縁が火を受けて赤く変色し

ていることから、町家罹災時に火を直接受ける状態であったことがわかる。簡易な構築物、たとえば、水を流す台などが上部に設置され、それから水を受けて暗渠に排水する役割を担っていたのかもしれない。構造物は現場打ちで、周辺に漆喰を張った痕跡が確認でき、三和土はなかった。

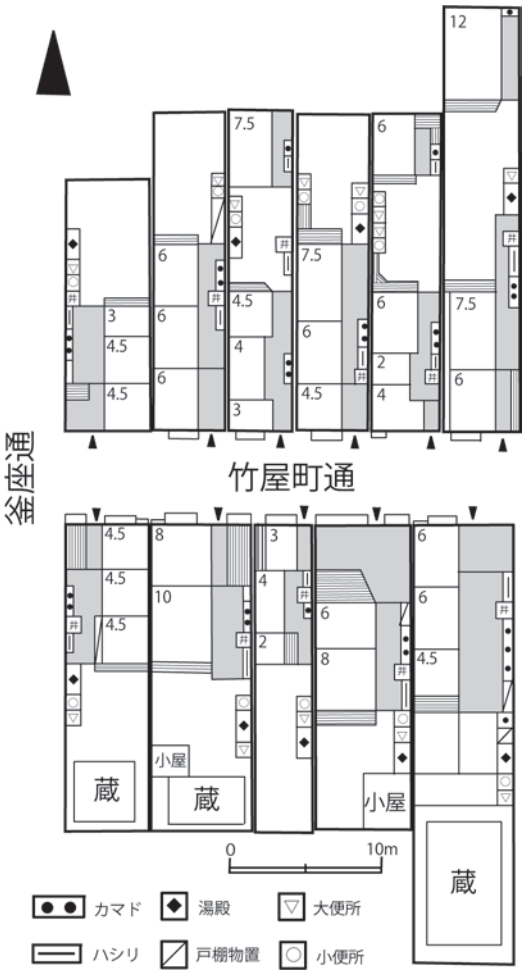
写真７は写真３の北半を南東から写す。東西につづく石列は屋敷境と考えている遺構である。写真中央に写る「堰」を有する構造物は写真６と同じ流し場などと思われる。南北にのびる溝の東と西に２か所設けられている。東側は残存状況が悪く、床面を確認したにとどまる。西側は被熱痕を有する漆喰で固めた「堰」が確認できる。両流し場は開口する溝により接続する。流し場より北側の溝は内側に段がつくことから、木蓋などで塞がれていたのだろう。なおこれが接続する東西軸の暗渠は開口していなかった。屋敷境より北側、西側の流し場より以西に漆喰張りの床面が残る。「ハシリニワ」に三和土ではなく、漆喰を用いている事例であろうか。第３図で示した写真７の流し場北側暗渠も、他の河原石に覆われた暗渠とは異なり、直接漆喰で覆われている。

５．指物屋町と西洞院辻の事例

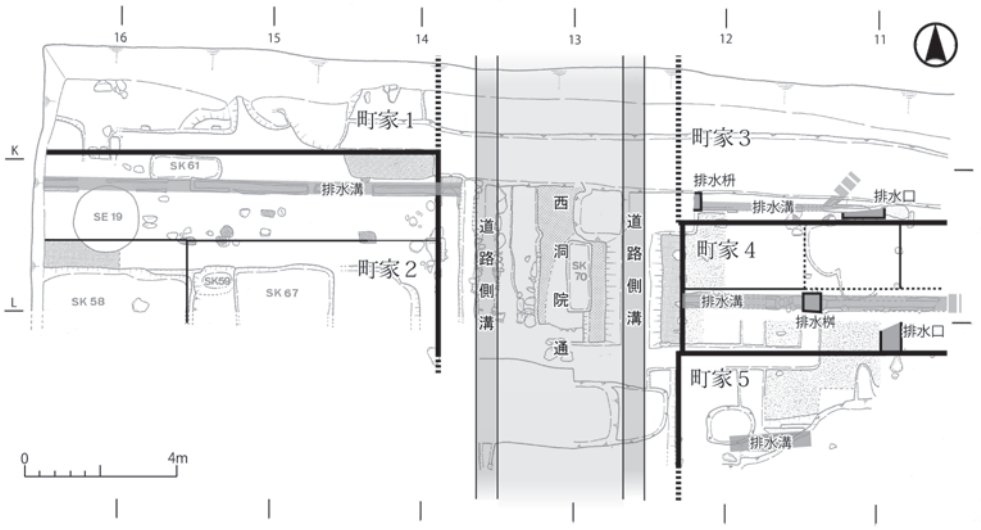
指物屋町の事例は、 情報137号でも提示したが、町家の構造を理解する上で重要なので再提示したい。第６図で町家の間取りを確認すると、町家の入口のある側が屋内の通りないし土間（ハシリニワ）となり、もう片側に隣接した縦並びの部屋が続いている。町家の奥には空閑地が広がるが、小屋や土蔵が設けられていたようである。

漆喰溝は排水溝の役割を果たしていると想定しているが、第６図の町家の中でこの機能が必要な箇所は各町家の、「ハシリ」であろう。「ハシリ」は現在の台所の流しにあたり、使用した水を流す施設である。写真６と写真７に写る漆喰の流し場が「ハシリ」の下部に位置したもしくは、接続したのではないか。しかし、他のSD3037、SD3038、SD3039などには同じ構造物がみられないため、必ずしも必要な設備ではなかったのだろう。

次いで第７図では西洞院辻の復元した町家を示した。図の中央には西洞院通りが通る。西洞院通りは側溝より内側はおよそ一間半（約３ｍ）程度の幅である。西洞院通りを挟んで向き合う町家間の距離はおよそ三間（約６ｍ）になる。溝幅も石組内はおよそ一尺五寸（約45cm）である。町家は調査地内で５軒ならび、町家２と町家４、町家５には道に沿って石が配されており、道と町家の境界である



第６図　指物屋町の町家



第７図　西洞院の町家　復元案

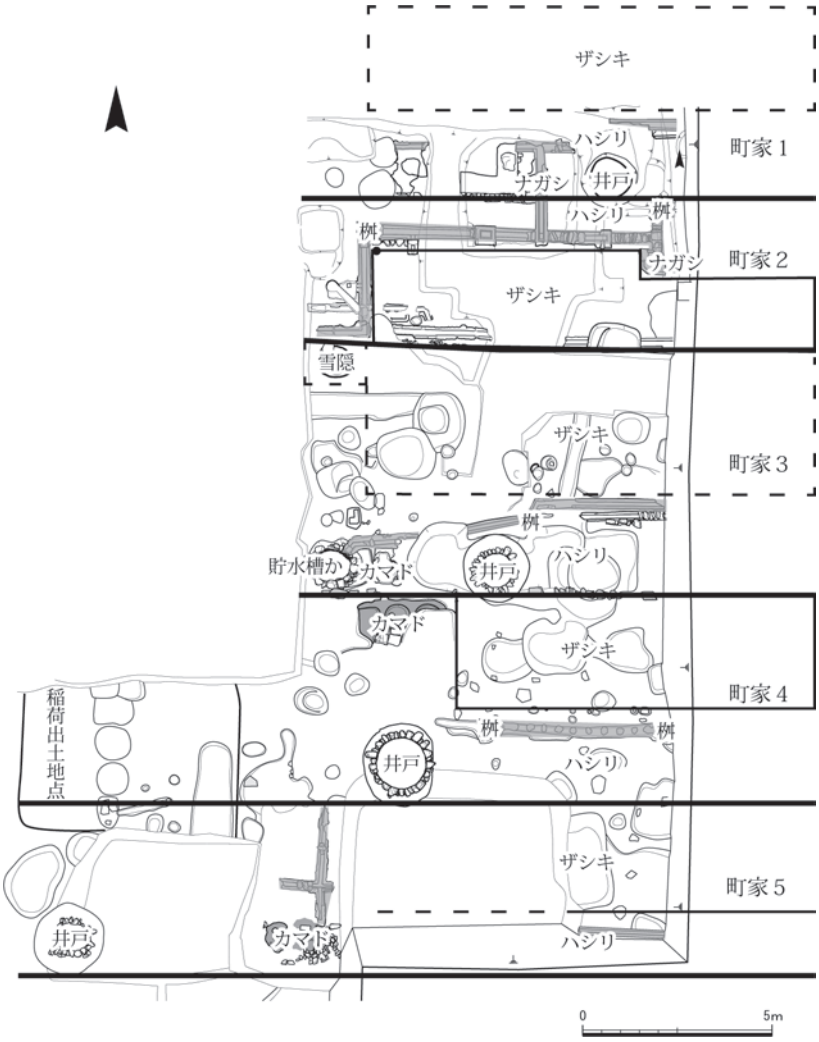
と推定した。西洞院辻では、家々の境を漆喰溝と石列の関係から推定した。

西洞院辻でも、漆喰溝は本来暗渠である。町家３の暗渠は町家の出入り口に排水桝を設け、泥等を沈殿させる役割を担っていたと思われる。町家４は北側にザシキ、南側にハシリと想定される。開口部と排水桝を有する暗渠を伴う土間が位置する。町家５は北側にザシキ、南側に暗渠を伴う土間が位置していた。

６．のりものや町の復元

今回の検討範囲であるのりものや町の復元をしたのが、第８図である。町は東側の新町通りに面する。西洞院辻の通りと町家の構造は「のりものや町」でも同様と思われるが、こちらは残念ながら判然としない。新町通りから町家の奥行きが21-22m（10間半から11間）、間口は町家２が２間、町家３が３間ほど、町家４が２間半ほどである。町家１と２の境は漆喰遺構に接続する石列に求めた。町家２と３、町家３と４は石列を境とした。町家４と５は井戸の位置と南側の漆喰溝の位置から町家境を求めた。いずれの町家もおそらく長屋建で通り庭を軸にした「通り庭」型の平面であったと思われる。町家１は座敷空間が残存していないため北半が不明である。町家の奥から漆喰が続き、新町通りに抜ける。漆喰を張った土間を有し、南側に流し場（ナガシ）と井戸を有する。生活排水は町家１側と町家２側に流れた。町家２は井戸が見つかっておらず、通り側に掘削されていたと考えられる。流し場（ナガシ）と屈曲する溝、３度の修築跡が確認できる漆喰暗渠が敷かれていた。流し場以外にも排水施設が２か所あり、今回は座敷空間になるのではないかとしたが、別の施設であるかもしれない。通りニワには三和土が敷かれていた。町家３は北側に座敷空間を有する。漆喰暗渠は新町通りからSE3034に接続する井戸（SE3138）の辺りが最も溝底が高く、東西に低くなるため、新町通りとSE3034に生活排水を流していたようである。SE3034の北側にわずかな漆喰床状の遺構が残存するため、この付近に何かしらの施設があったと考えられる。雪隠は北側座敷空間の奥に位置する。ハシリは残存していないが、井戸、かまど、便所などの遺構が残存する。町家４は北

側に座敷空間が位置したと思っているが判然としない。暗渠は瓦を転用しており、これの接合部を漆喰で接着している。桝が２基みつかっている。調査地東側の桝からは多量にシジミが出土した。井戸(SE3154)の東側にハシリが位置していた。座敷空間の奥にかまどが位置する。この構造は例がなく、消去法的に決定したので、よほどの特殊事例もしくは再考が必要である。町家５は北側に座敷空間が位置したと考えられる。トレンチ隅の東側で検出できた暗渠は屈曲し、かまど(SL3086・3087)の北の暗渠に続くと考えられ、井戸(SE3072)より取水したと思われる。



第８図　のりものや町の町家　復元案

いずれの町家も平面の片側にしまりのよい遺構面、三和土の痕跡などが確認でき、もう片側に焼土が堆積している状況が看取できた。この焼土の堆積している側が座敷空間であったのではないかと考え、当案を作成した。また、これに加えて町家諸設備の位置関係から居住空間を復元した。同じように焼土の堆積が町家４のSK3118の奥、SD2097との境にあり、ここから１対の稲荷狐が出土した。蔵などの建物の基礎は確認できておらず、詳細は不明であるものの、町家にも稲荷社が位置していたと考えてもよいのではないだろうか。

６．おわりに

今回は平安京左京一条三坊三町に位置したのりものや町の町家の復元を試みた。漆喰の暗渠を利用して下水施設をつくるのは、江戸や大坂ではあまり確認できず、19世紀以降の京都の独自性といえるのではないかと考えている。調査があまりなされない時代の遺構であるが、数少ない事例から当時の町家構造を考えることは、近世後期の下水構造を考える上でも重要となっていくのではないだろうか。本論は、推論に推論を重ね、不勉強が多々ある中の検討であり、諸処の不足

を感ぜざるを得ない。今後の課題としたい。　　（加藤雄太＝当調査研究センター調査員）

参考文献

（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8

（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2015-12

（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016『寺町旧域・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-16

同志社大学歴史資料館 2022『相国寺旧境内・公家町遺跡発掘調査報告書―同志社大学致遠館建替え工事に伴う発掘調査―』同志社大学歴史資料館調査研究報告第 19 集

（株）文化財サービス 2022『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第 22 集

加藤雄太「左京近衛・西洞院辻の町家について」公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第 137 冊

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2021「平安京（左京一条三坊三町）」『京都府遺跡調査報告集』第 182 冊

土本俊和 1993「7・4 京の町」高橋康夫他編『図集日本都市史』東京大学出版会

研究ノート

古墳時代後期における集落廃絶の背景について

小池　寛

１．はじめに

古墳時代中期になると、中国起源の文物は姿を消し、朝鮮半島起源の文物が主流となることから、日本の外交は、百済や伽耶、新羅との対外交渉が中心となったと考えられている。そのような状況の中、いわゆる渡来人の渡来時期をめぐっては、『古事記』『日本書紀』応神天皇（270～310年）即位７年の高麗人、百済人、任那人、新羅人来朝記事や即位14年の新羅の妨害を受けながらも百済から弓月君（ゆづきのきみ）が120県の民を率いて渡来する記事などから、当該時期の渡来説が広く支持された。しかし、戦後、雄略天皇（456～479年）の記事にも同様な記事がみられることと475年に高句麗の侵攻により百済の首都が漢城（現ソウル）から熊津（現光州）へ南下し、その結果、戦禍を逃れるために多くの百済人が渡来したとする説などが支持されている。一方、考古学的には、陶邑古窯址群や大庭寺遺跡から出土した初期須恵器の研究や平城宮下層で出土した朝鮮半島系土器と共伴した木製品の年輪年代が412年、宇治市街遺跡での共伴木製品の年輪年代が389年を示したことから、従来考えられてきた渡来時期を再考するに到っている。渡来人の出自については出土する朝鮮半島系土器や初期須恵器が、伽耶洛東江流域や百済栄山江流域の陶質土器に近似することから、一地域からの限定的な渡来ではなく、多元的な渡来と考えられている。

小稿は、渡来人の集落参入が認められる古墳時代集落が、後期前半を中心とする時期に衰退、廃絶する背景について記述する。

２．蔀屋北遺跡からみた中後期の拠点集落の様相

古墳時代の集落には、前期に成立し中後期まで存続する集落や、中期に成立し後期に衰退・廃絶する集落、一方、前期に成立し中期に入って居住施設が竪穴建物から掘立柱建物へと変化し、鉄生産を始め、今来才伎（いまきのてひと）と呼ばれる渡来人が参入し、朝鮮半島系の新しい技術が考古学的に確認できる集落などが認められる。

四条畷市蔀屋（しとみや）北遺跡では、朝鮮半島系の土器をはじめ、馬骨や馬歯、ガラスや滑石製模造品、その他、木製馬具をはじめ鉄生産を示す鉄滓や鉄製品などが多量に出土した。また、数多くの土器とともに、大量に出土した製塩土器は、大阪湾岸に点在する製塩遺跡から搬入されたものとは量的に考えにくく、当該遺跡において塩生産の最終工程が行われていたことをうかがわせている。馬の飼育に塩分摂取は必要不可欠であり、数多く出土した製塩土器は、馬の生産や飼育と密接に関連している。また、宗教的行為としての馬の屠殺を示す遺体埋納坑なども確認されている。

一方、この遺跡では、数多くの柱穴が確認されており、一般的な集落の居住施設が竪穴建物で

あるのに対して、竪穴建物と掘立柱建物で集落が構成されていることもひとつの特徴である。出土土器には、須恵器や土師器のほか、縄蓆文や正格子文、斜格子文叩き痕を有する陶質土器甕のほか、無文の叩き板や当具で整形したため、内外面に平滑な叩き痕が観察される甕などが見られる。一方、器台や高杯、小型平底土器など、伽耶地域や百済栄山江流域に起源が求められる土器も出土している。また、集落内祭祀に使用される滑石製模造品や装身具としての玉生産に関連する砥石も出土している。特に、和歌山県紀の川流域で採取される滑石や同じく紀淡海峡西庄遺跡で生成された製塩土器なども比較的多く見られる。その他、緑色凝灰岩や琥珀など他地域との交易を示す遺物や炉跡や鉄滓、鞴羽口、砥石などの鍛冶関係遺物、金属製品も出土している。特に、この時期に出現する朝鮮半島起源の提砥石の出土も重要な資料である。

以上のように、蔀屋北遺跡では、畿内政権管轄下において馬の生産が行われ、他地域との地域間交流や今来才伎と称される渡来人が朝鮮半島から集落内に参入し、著しく生産力が向上したことが判明している。蔀屋北遺跡において集落が形成される時期は、陶邑古窯址群TK216型式併行期(以下、TK216型式併行期と記載)以前と推定されており、初期には居住域の形成や区画溝の開削とともに、小規模集落が点在する状況が確認されている。一方、TK216型式併行期からTK23～47型式併行期にかけて竪穴建物や掘立柱建物の基数・棟数が激増し、出土遺物が最も増加する時期であることから、集落の活性期と捉えられている。

しかし、MT15型式併行期には、竪穴建物や掘立柱建物が激減し、居住空間を区画する区画溝は、ほぼ埋没する。遺構や遺物から見るとそれまでに形成された集落が衰退する時期と考えられるが、TK10～TK43型式併行期には集落が再編成され、小規模ながら存続することが確認されており、その後、集落は廃絶している。

３．古墳時代後期における廃絶する集落例

前章では、蔀屋北遺跡が古墳時代中期初頭に形成され、畿内政権の管轄下において馬の生産に携わった集落であること、また、後期後半まで集落は存続するものの後期前半に集落が再編成されていることについて述べた。

このような集落の消長は、蔀屋北遺跡に限られたことではないことを京都府精華町森垣外遺跡例で確認しておきたい。同遺跡は、集落規模こそ蔀屋北遺跡には及ばないが、複数の大壁住居の検出、居住施設としての掘立柱建物、一辺46ｍの溝で囲繞(いにょう)された首長居館や柱材強化のための貯木施設などの集落遺構が確認されている（第１図)。また、縄蓆文、正格子・斜格子、無文叩き痕を有する陶質土器の甕のほか、高杯や器台、移動式竈、甑、小型平底土器などの朝鮮半島系の土器の出土、緑色凝灰岩原石や同管玉、琥珀、滑石原石や滑石製模造品、朝鮮半島起源の提砥石、軽石、鉄生産を示す炉跡や鉄滓、鞴羽口、金属製品、紀淡海峡西庄遺跡や大阪湾沿岸域から搬入された製塩土器、馬歯などが出土している。これらの遺物は、今来才伎と呼ばれる渡来人が集落に参入していたことを示している。

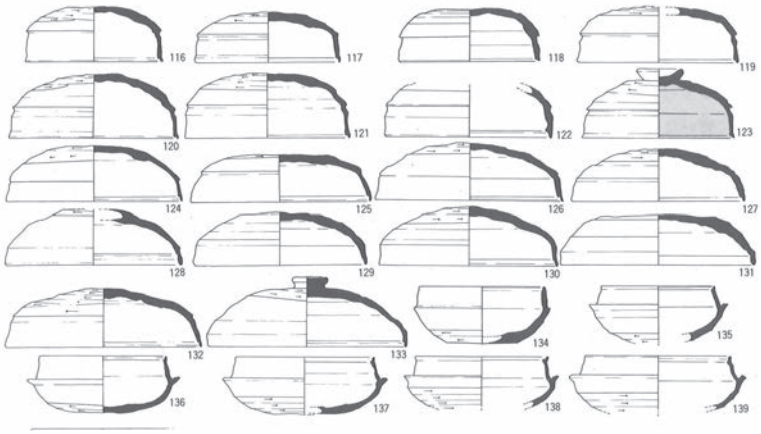
当該遺跡では、布留式併行期新段階の土師器・壺が低墳丘方形墓の周溝から出土しており、古

墳時代前期に形成される北尻古墳群の一角を集落域で検出していることから、森垣外集落の成立時期は、北尻古墳群の造墓終焉期以後と考えられる。一方、掘立柱建物による集落の形成期を示す遺構として、TK216型式併行期の須恵器甕と土師器高杯が埋納された柱穴を検出している。また、首長居館を囲繞する溝の下層からTK23・47型式併行期の須恵器、土師器が出土しており、最上層からはMT15～TK43型式併行期の土器が出土している（第2図）。溝の度重なる改修などを考えると、開削時期を特定することはできないが、囲繞溝の埋土の堆積状況からMT15型式併行期には人為的に埋められたと考えられる。堆積土から建築部材や完形に近い土器が出土している。

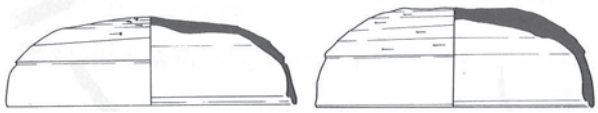
囲繞溝が埋められ整地された後に竪穴建物15・16が建てられており、床面から出土した土器がMT15～TK43型式併行期の土器（第３図）であることから、囲繞溝の整地土層の出土土器と同一型式であることがわかる。首長居館が、溝の堆積状況と両者の切り合いから意図的に廃棄されていることは明らかであるように、囲繞溝の直上に竪穴建物が建てられていることは、集落は終息の象徴でもある。

この現象を蔀屋北遺跡で確認すると、TK216型式併行期から同TK23・47型式併行期にかけて竪穴建物・掘

第１図　森垣内遺跡居館と竪穴建物



第２図　森垣内遺跡囲曉溝（溝22）出土遺物



第３図　森垣内遺跡竪穴建物15・16出土遺物

立柱建物が激増するとともに出土遺物の顕著な増加などから、集落の活性期として捉えられている。しかし、MT15型式併行期には、竪穴建物や掘立柱建物は激減し、居住空間を区画する区画溝は、ほぼ埋没することからそれまでに形成された集落が衰退する時期と考えられており、両者の集落消長は符合している。

４．各地域における古墳時代中後期集落の消長

先に述べた２遺跡の動態を抽出して、集落消長を一般化することは、偏向した歴史事実を提示することになるため、近畿一円に分布する中後期集落の動態について概観しておきたい。

（１）北河内地域

北河内地域は、淀川左岸、大阪府北東部に展開する枚方市・交野市・寝屋川市・四条畷市・大東市・門真市・守口市域を範囲とする。先に述べた蔀屋北遺跡が所在する地域にあたり、上私部遺跡や森遺跡、楠遺跡、長保寺遺跡、讃良郡条里遺跡などの集落遺跡において、TK216型式併行期に集落が形成され、基本的にはMT15～TK43型式併行期に衰退・廃絶を迎えている。他の地域に比べて、集落の存続期間が近似する遺跡数の比率は高く、製塩土器や朝鮮半島系土器などは共通して出土する遺物であり、古墳時代中後期における生産遺跡が集中する生産拠点地域であることが、存続期間の共通性の要因と考えられる。

（２）摂津地域

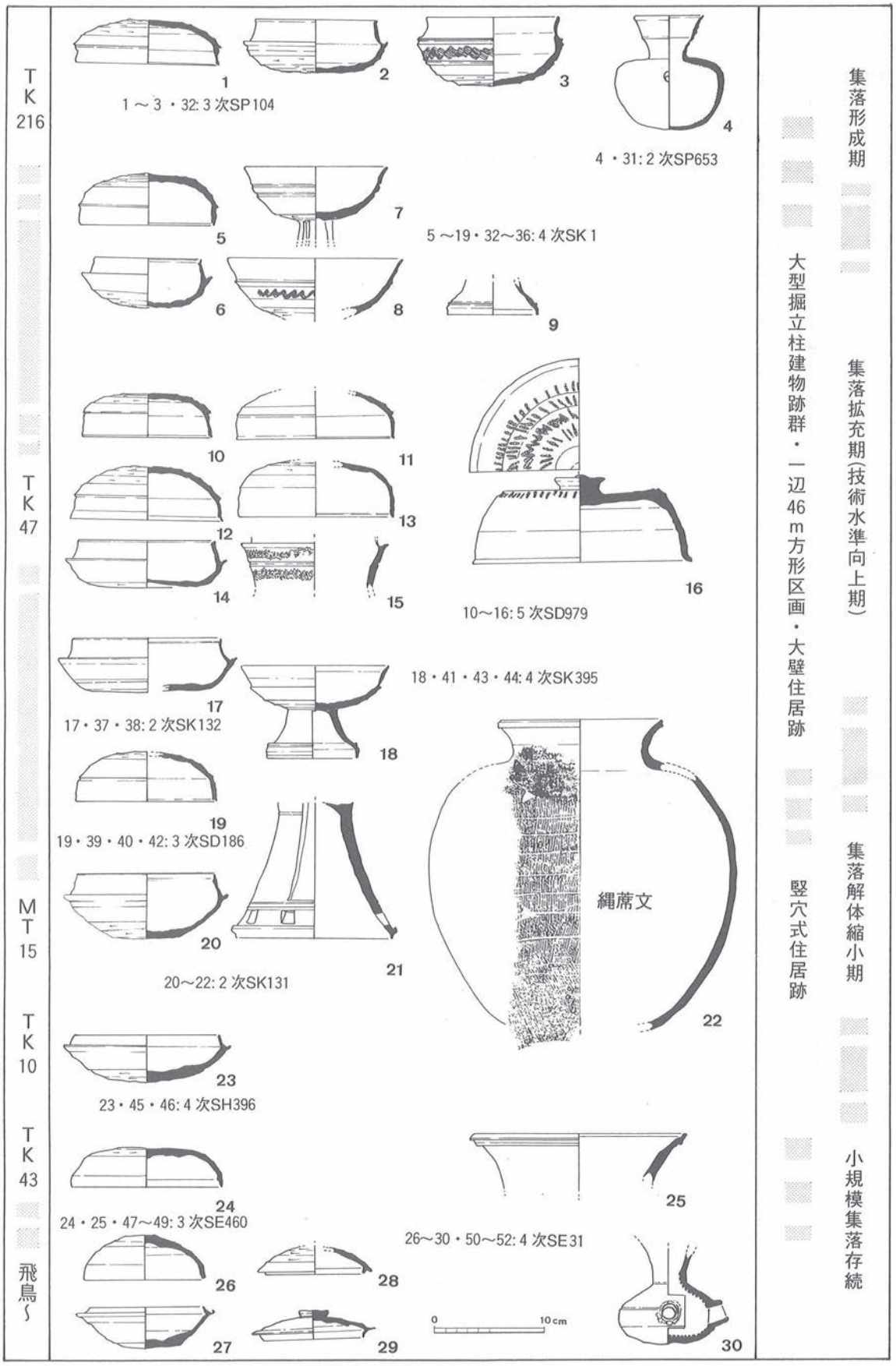
摂津地域は、大阪府北中部から兵庫県南東部にあたり、島本町・高槻市・茨木市・摂津市・吹田市・大阪市・能勢町・豊能町・箕面市・池田市・豊中市・三田市・猪名川市・川西市・宝塚市・伊丹市・芦屋市・西宮市・尼崎市・神戸市を範囲としている。TK216型式併行期に集落が形成され、MT15～TK10型式併行期に衰退期を迎えた集落は、先に述べた北河内地域ほど多くない。集落の形成時期がやや後出する生産遺跡として新池遺跡や溝咋遺跡があり、古墳時代前期に成立し、MT15～TK10型式併行期に衰退する集落として、安威遺跡、郡・倍賀（へか）遺跡、東奈良遺跡、山ノ上遺跡などがある。

（３）大和地域

大和地域は、物部氏や葛城氏、和邇氏などの大和朝廷の中核を担う氏族が拠点をおく地域であり、他地域とは様相は異なっている。特に、菅原遺跡や南紀寺遺跡、和邇遺跡、脇本遺跡などは古墳時代初頭に集落が形成され、古墳時代を通して集落が維持されている。MT15～TK10型式併行期に衰退・廃絶する集落はごく僅かであり、この点においても他地域とは異なっている。

（４）中河内地域

中河内地域は、大阪府東部中央にあたり、東大阪市・八尾市・柏原市を範囲とする。古墳時代の集落自体が他の地域に比べて少なく、畿内政権下で鉄生産に携わった遺跡として知られる大県遺跡は、5世紀末にあたるTK23～TK47型式併行期に集落が形成され、6世紀後半まで継続されて



第４図　森垣内遺跡出土土器の編年と集落の消長

いる。また、概ね古墳時代中期に集落が存続する遺跡として、長原遺跡や八尾南遺跡がある。

（５）南河内地域

南河内地域は、富田林市・河内長野市・松原市・羽曳野市・藤井寺市・大阪狭山市・太子町・河南町･千原赤坂村で構成される。土師ノ里遺跡は、古墳時代中期に成立する生産遺跡であるが、古墳時代後期末まで継続されることが分かっている。この地域では、古墳時代後期までの集落存続期間が限定できる集落遺跡は確認できない。

（６）和泉地域

和泉地域は、大阪府南西部にあたり、堺市・泉大津市・和泉市・高石市・忠岡町の和泉北部と岸和田市・泉佐野市・泉南市・阪南市・熊取町・田尻町・岬町の和泉南部に分かれる。土師遺跡や大庭寺遺跡、大園遺跡、寺田遺跡などの生産遺跡は、各々、形成される時期は異なるが、概ねMT15～TK10型式併行期に衰退・廃絶期を迎えている。

（７）紀伊地域

紀伊地域において、紀淡海峡に所在する西庄遺跡は、製塩遺跡として著名である。この遺跡から出土する器壁が薄く椀型を呈し、内面に貝殻条痕が残る製塩土器は、畿内内陸部の拠点集落で数多く出土している。また、紀の川流域には、緑色を呈する滑石が採取されることから、畿内一円において交易による流通が盛んにおこなわれた地域でもある。このような状況の中、TK216型式併行期に集落が形成され、MT15～TK10型式併行期に衰退する集落遺跡として、西田井遺跡、田屋遺跡、西庄遺跡、音浦遺跡、鳴神Ⅳ遺跡などがあげられる。これらの遺跡は、西庄遺跡のように生産や交易に関係している集落が多い傾向にある。

以上見てきたように、淀川水系から河内湖に近い北河内地域や摂津地域、紀伊地域の集落遺跡に古墳時代後期に衰退・廃絶をむかえる傾向があることが把握できたと思う。他方、畿内政権の中核地である大和地域の一部には同一傾向を示す集落遺跡も散見できるが、共通する消長変化を確認することはできない。また、大和地域と同じく南河内地域にもほとんど同一傾向の遺跡は見られないことも概ね把握できた。各地域と畿内政権との関係性ついても、集落の動態を考える上で重要な要素であろう。

５．まとめ

古墳時代の集落が形成される要因は一律ではなく、弥生時代から継続する集落や畿内政権との関係や政権管轄下における生産・交易に関係することによって成立する集落、あるいは、地域開発や交通要衝地を拠点とする集落などさまざまである。一方、地域ごとにある程度のまとまりをもちながらも、古墳時代後期にあたるMT15～TK10型式併行期に衰退を迎え廃絶する集落が、淀川水系から河内湖に近い北河内地域や摂津地域、そして、紀伊地域に多く見られる傾向を前章で整理した。

最後に古墳時代後期にあたるMT15～TK10型式併行期に集落が廃絶する要因について考えておきたい。先に述べた森垣内遺跡では、首長居館の一辺46mの囲繞溝が、古墳時代後期に人為的

に埋められ、整地後、竪穴建物がその直上に建てられており、集落解体の典型例としての一例としてあげた。これは、自発的な居住地の移動により廃村となり、その後、竪穴建物による小規模な集落が再形成されたとみるよりも、何らかの政治的な要因により、拠点集落が解体され、その直後に小集落へと分村された経緯を検出遺構は示唆している。そのような変化が生じた古墳時代後期とは、507年に樟葉宮で即位する継体大王は、511年に森垣内遺跡が所在する南山城の筒城宮に遷都し、その後、518年に乙訓の弟国宮へ遷都する。これらの遷都を経て、最終的に526年に大和磐余玉穂宮へ遷都する。継体大王は、朝鮮半島との政治的交渉や交易を円滑に進めるため、大和川でしか大阪湾沿岸に出られない大和盆地から宇治川・木津川・桂川の３河川が淀川へと合流する一帯に宮を造営し、周辺域の整備を進め円滑な東アジア外交を推し進めたと考えられる。

一方、それ以前の古墳時代中期には、今来才伎と称される渡来人が朝鮮半島から畿内政権内に参入した結果、権力基盤となる新技術を進展させ、勢力基盤強化を達成したと考えられる。また、一方、各地域首長下の各集落にも今来才伎は参入し、集落の農業生産力や手工業生産力を飛躍的に向上させ、集落の拡充・拡大へと結び付けたと考えられる。古墳時代後期に至って継体大王率いる畿内政権は、政権の権力基盤を増強することにより、地域首長に委ねていた地域支配を直接支配に転じた。その一方で、拡充・拡大した各集落を直接支配するまでに至り、安定した勢力基盤を維持する目的で政治的にこれらの拠点集落を解体したのではないかと考えられる。それを傍証するかのように、畿内の広範囲な地域において、古墳時代後期に拠点集落が解体された事例が数多く見られる。

畿内政権が古墳時代前期に成立した直後から各地に前方後円墳が築造される。畿内政権は、当初から直接的にすべての地域を支配していたのではなく、各地域を管轄する地域首長にその支配を委ねることによって政治的な支配を確立しており、古墳時代中期までは決して政治的に安定した支配とは言えない状況であった。しかし、本稿で見たように古墳時代後期に主要な集落が畿内政権によって政治的に解体され、畿内政権による直接的な地域支配が確立した当該時期以降にこそ、政治的に安定した畿内政権がようやく確立されとたみるべきなのである。

（小池 寛　当調査研究センター調査課長）

参考文献

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999「森垣外遺跡第２次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 86 冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000「森垣外遺跡第３次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 91 冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001「森垣外遺跡第４・５次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 96 冊
大阪府教育委員会『蔀屋北遺跡発掘調査概要１～７』
藤田道子 2016「蔀屋北遺跡の集落の変遷について」『河内の開発と渡来人』大阪府立狭山池博物館
田中元浩 2017「開発の進展と集落の展開からみた畿内地域」『古代学研究 211』古代学研究会
古代学協会 2012　古代学研究会 2012 年度拡大例会『集落から探る古墳時代中期の地域社会―渡来文化の受容と手工業生産―』古代学協会

令和３年度発掘調査略報

11. カンジョガキ遺跡第２次

所 在 地　京丹後市大宮町周枳地先

調査期間　令和３年５月18日～令和４年２月10日

調査面積　2,550㎡

はじめに　この調査は、一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、遺跡の中心にあたる谷中央部（Ａ地区）、北側の丘陵の尾根及び谷部（Ｂ地区）、東側丘陵裾部（Ｃ地区）である。

調査概要

Ａ地区　圃場整備により大きく削平・撹乱を受けていた。トレンチ北東隅部で溝２条・柱穴11基等を検出した。柱穴からは建物は復元できない。遺物は、時期不明の細片化した土器が少量出土したのみである。中央部では、北東から南西方向に流れる自然流路５条とこれに注ぐ３条の流路を検出した。最も新しいＮＲ01は、大半が削平されていたが、上流側と下流側で部分的に検出した。流路幅８～15m、深さ0.4mを測る。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、板状の木製品、フイゴ羽口、石鏃・叩石・砥石・磨石・軽石等の石製品、碧玉原石・碧玉製管玉が出土した。ＮＲ02は総延長115mを測り調査区を貫流する。幅約５～11m、検出面からの深さは1.4～1.7mを測る。調査区の中央部西側で検出した自然流路ＮＲ07からは早期末の縄文土器鉢が出土した。

Ｂ地区　谷部の調査地では、弥生時代～平安時代の遺物が出土した。検出された遺構は、竪穴建物１基、土坑１基、柱穴等である。竪穴建物は一辺約５ｍ・深さ0.6mの規模を持ち、床面には周壁溝を有する。古墳時代前期の土器が出土した。埋土上層からは、鉄滓も出土したが時期は不明である。丘陵部の調査地は、表土直下が地山面となり、遺構は検出されなかった。

Ｃ地区　弥生土器・土師器・須恵器・木製品を含む包含層を確認した。

まとめ　Ａ地区では８条の流路を検出し、縄文時代から平安時代までの遺物が出土した。遺構は検出できていないが、第１次調査のガラス玉に加え、碧玉原石・碧玉製管玉・炉壁・フイゴ羽口の出土等から周辺に生産遺跡の存在が示唆される。

Ｂ地区では竪穴建物を、Ｃ地区では遺物包含層を確認した。今後の調査で丘陵部や丘陵裾部での縄文時代～平安時代の集落遺構の検出が期待される。

（増田孝彦）

調査地位置図（国土地理院　1/25,000　峰山）

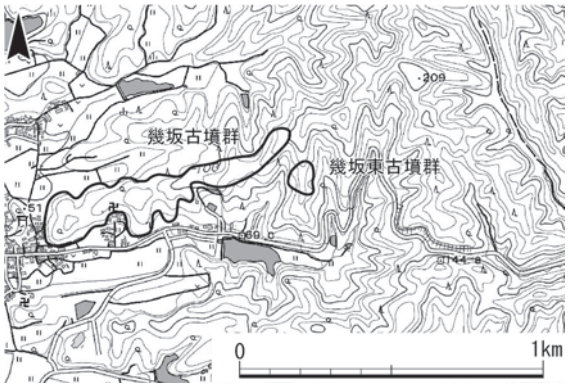
12. 幾坂東古墳群・幾坂古墳群

所 在 地　京丹後市大宮町周枳地先

調査期間　令和３年６月１日～令和４年１月28日

調査面積　幾坂東古墳群 150㎡、幾坂古墳群 600㎡

はじめに　幾坂（いくさか）東古墳群および幾坂古墳群は、高尾山を水源とする丹後半島最長の河川である竹野川の上流域、右岸の丘陵上に位置する。古墳群が立地する丘陵は花崗岩を基盤とし、西側には丹後半島で最大の峰山盆地が広がる。今回の調査は一般国道312号大宮峰山道路整備事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。



調査地位置図（国土地理院　1/25,000　峰山）

幾坂東古墳群の調査概要　幾坂東古墳群は過去に調査例がなく、今回が第１次調査である。小規模調査区として１～４トレンチを設定した。１・３・４トレンチでは顕著な遺構は確認されなかった。２トレンチでは南東側で埋葬施設を確認したため、Ａ地区として本調査を行い、幾坂東３号墳を検出した。

幾坂東３号墳の調査前の標高は最高所において130.21ｍで、丘陵西側に広がる盆地との比高は約90ｍである。腐葉土層の下に表土が約0.2ｍ堆積しており、その下層は風化した花崗岩を基盤とする地山層である。盛土は確認できず、幅約5.1ｍ・長さ約9.4ｍ程度の地山整形による不整形な平坦面をつくりだしている。丘陵は地すべりにより旧来の地形が失われており、墳丘の形状は不明である。埋葬施設は調査区南東側で検出しており、木棺直葬と考えられる。主軸は南北方向である。墓坑は検出面で長辺約4.3ｍ・短辺約2.4ｍ、検出面からの深さ約0.68ｍで２段墓坑であるが、南側は後世の崩落によって一部が失われている。木棺痕跡については平面では確認できず、断面でも明瞭には確認できなかったが、墓坑底がわずかに弧状であり、舟底状木棺と推定する。

副葬品は棺内から玉類および鉄刀子が出土した。玉類は勾玉と管玉、小玉が南側でまとまって出土した。鉄刀子は棺内中央よりやや北側で出土した。鋒は北側を向く。また表土掘削中に多数の土師器片が出土した。出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

幾坂古墳群の調査概要　幾坂古墳群は過去に調査例がなく、今回が第１次調査である。小規模調査区として１～３トレンチを、面的な発掘調査区として幾坂１号墳全体を含むＡ地区を設定した。１・３トレンチでは埋葬施設が確認されたため調査範囲を拡張し、１トレンチ拡張範囲をＢ地区、３トレンチ拡張範囲をＣ地区として面的な調査を行った。その結果、Ｂ地区では幾坂41号墳を、Ｃ地区では幾坂40号墳を検出した。

幾坂１号墳は、調査前の標高が138.16m、盆地との比高は98mである。墳丘は長軸12.4m、短軸9.4m、高さ2.0mの楕円形である。墳丘平坦面上で埋葬施設を２基検出したが、後世の削平のためか遺存状態が悪く、南西側は検出が困難な状態であった。埋葬施設からガラス製小玉が出土したほか、表土掘削中に土師器・須恵器が出土した。出土遺物から古墳時代前期に築造されたのちに、古代の土地利用によって削平を受けたと考えられる。

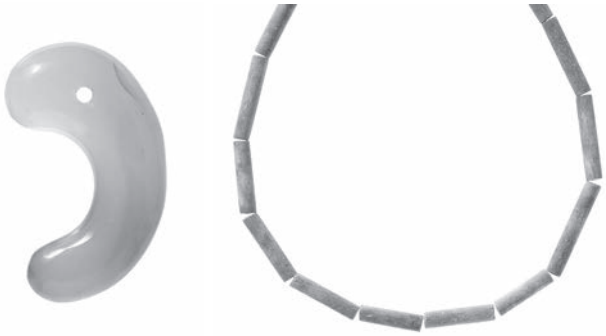
幾坂40号墳は、調査前の標高が148.02m、盆地との比高は108mである。墳丘は地すべりによって崩落しており、正確な形状は不明である。かろうじて残る崩落を免れた傾斜変換点から復元すると、墳丘平坦面は一辺13m程度であり、墳丘は一辺20m程度・高さ２m程度の方墳と推定できるが、狭長な丘陵尾根上にあり、本来整美な方墳ではなかったと考えられる。埋葬施設は３基検出しており、剣・刀・鏃・槍先・鉾などの鉄製武具類や、臼玉・勾玉・管玉などの玉類、竪櫛などの漆製品が出土したほか、表土掘削中に土師器が出土した。出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

幾坂41号墳は、調査前の標高は最高所が136.53m、盆地との比高は96mである。調査区西側は、後世の地すべりによって大きく崩落しており、墳丘の本来の形状は不明である。また、墳丘裾が確認できず、明確な墳丘を整形せずに丘陵の自然地形を墳丘として利用したと考えられる。墳丘平坦面上で埋葬施設２基を検出したが、墳丘の流失や崩落による削平を受けており遺存状況が悪い。表土掘削中に土師器破片が出土した。

まとめ　今回の調査では幾坂東古墳群で１基、幾坂古墳群で３基の古墳を調査した。いずれの古墳も地すべりや後世の改変の影響を受けていたが、多数の遺物が出土した。鉄製品の出土数は総数で70点を超え、玉類は1500点以上である。特に幾坂40号墳では多種の鉄製武具類や多数の玉類、漆製品が出土しており注目できる。竹野川上・中流域では古墳時代前期後半から中期にかけての有力墓としてカジヤ古墳や、左坂古墳群Ｃ支群21号墳、大谷古墳が挙げられる。幾坂40号墳はこうした古墳と異なり、盆地との比高や保有する鉄器の量が異なる。これは被葬者の性格や権力基盤の差異を示す可能性があり、重要な検討課題である。

（名村威彦）

幾坂古墳群遠景（南東から）



幾坂40号墳出土の瑪瑙勾玉と管玉（縮尺不同）

13. 佐屋利遺跡

所 在 地　京丹後市峰山町新町・荒山地内

調査期間　令和３年５月12日～令和４年３月４日

調査面積　5,000㎡

はじめに　佐屋利（さやり）遺跡は竹野川右岸の微高地上に位置する遺物散布地とされていた。国道312号道路新設改良事業に先立って発掘調査を実施した。なお、同事業の発掘調査は２年目である。

調査概要　調査対象地に１～３区の調査区を設定し、調査を実施した（写真１）。

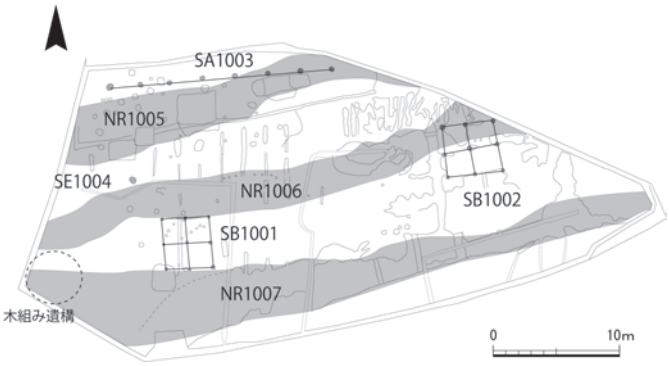
①１区　耕作土直下から古代末～中世初期の土師器、須恵器、輸入陶磁器、櫛、下駄、曲桶などを含む約20cmの包含層を確認した。包含層下の第１遺構面で、総柱の掘立柱建物２基（SB1001、SB1002）、柵列（SA1003）、井戸（SE1004）と、東から西へ横断する３条の自然流路（NR1005～NR1007）を検出した。

調査地位置図（国土地理院 1/25,000 峰山）

自然流路内に弥生中期～中世初期の遺物が散漫に包含されていたことから、下層遺構の有無と自然流路の形成過程を確認するため、面的な掘り下げを実施した。その結果、第１遺構面までの土層は、中世初期までに発生した複数回の北側段丘から流れ込んだ土砂流によって形成され、途中複数方向の水流が発生し、流路となったことが判った。NR1005とNR1006は、流路内堆積物の状況から活動的

写真１　佐屋利遺跡調査区全景（南西から）

な流路ではなく、洪水時の侵食によって形成された氾濫流路や地形面の下刻によって形成された開析流路もしくは小規模な開析谷と解釈できる。一方、NR1007の低位箇所では二重の杭列で構成された木組み遺構を検出した。水利施設の可能性があり、安定的に水が流れていたと考えられる。



第２図　１区遺構図

②２区　遺物包含層は近現代の耕作で広範に削平され、部分的に残存していた。包含層の下層で、古代末～中世初期の土師器・須恵器・輸入陶磁器・石製品・銭貨などの遺物を含む溝、ピット群、土坑などの遺構を検出した。これらは２区の東～南東にかけて密に分布する。

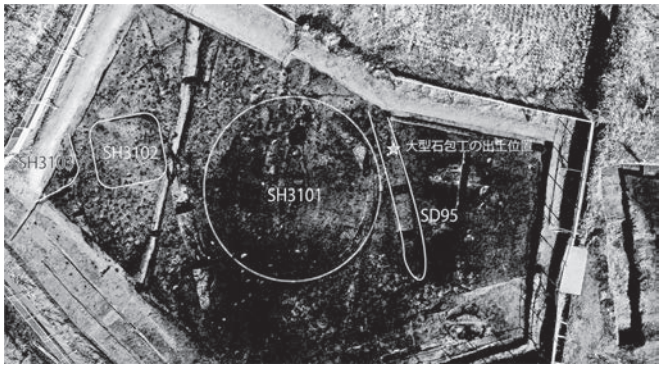


写真２　３区全景（真上から）

③３区（写真２）　調査区の西側では耕作土直下に弥生時代中期の遺物を多く含む包含層が残存していた。包含層除去後、地山面直上で古墳時代の方形竪穴建物２基（ＳＨ3102、ＳＨ3103）、弥生時代中期の溝（ＳＤ95）、直径約９ｍの大型竪穴建物（ＳＨ3101）などを検出した。ＳＤ95からはほぼ同大の２点の大型石包丁（写真３）が、刃部が鋭利に研がれた状態で出土した。大型石包丁の用途を考える上で、興味深い出土状況である。また、包含層内からは絵画土器が出土している。

写真３　３地区出土の大型石包丁（長さ31.5cm）

まとめ　今年度の調査では、竹野川右岸地域において類例の少ない、古代末～中世初期と弥生時代中期の集落跡を発見した。

１区と２区では、古代末～中世初期の良好な出土品を得ることができた。特に１区で出土した木製品には日常生活用具が含まれており、当時の人々の生活実態を考察するために重要である。また、１区で確認した土砂流で形成された自然流路も、中世初期段階での土地利用のあり方を考えるうえで好適である。２区は遺跡の残存状態は良好でなかったものの、１区の調査成果とあわせて当遺跡における古代から中世初期の遺構の展開について検討する資料を得ることができた。

３区では、古墳時代と弥生時代中期の集落遺跡の存在を確認できた。本地区で出土した弥生時代中期の遺物のうち、絵画土器や大型石包丁は、貴重な資料である。　（三好博喜、面 将道）

14. 犬飼遺跡第９次

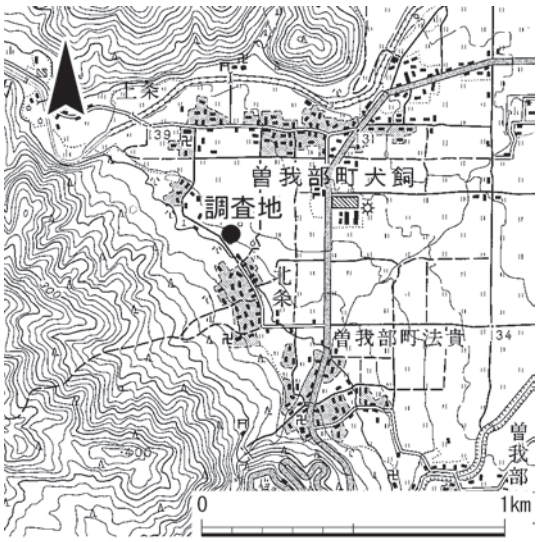
所 在 地　亀岡市曽我部町犬飼地内

調査期間　令和３年５月18日～令和３年10月５日

調査面積　1,170㎡

はじめに　犬飼（いぬかい）遺跡は、亀岡盆地南西の霊仙ヶ岳の山麓に立地する。北は丁塚山、西は朝日山、南は霊仙ヶ岳に囲われ、平野部には犬飼川と法貴谷川が南西から北東の方角に流れている。周囲には犬飼城跡、法貴北古墳群、法貴古墳群、法貴館跡などが分布し、古墳時代から中世までの遺跡が存在する。 犬飼遺跡では、これまでに８回の調査が実施された。今回の調査は、一般国道423号（法貴バイパス）建設に伴い、令和２年度の第６次調査の成果を受けて実施したものである。

調査概要　調査地は、令和２年度の第６次調査での６か所の小規模トレンチ調査の後、K地区として拡張した地区である。前年度に引き続き調査を実施した。前年度の調査では、奈良・平安時代の遺物包含層を確認し、溝や土坑、柱穴状の土色変化を確認した。溝からは土師器・須恵器が多量に出土した。 緑釉陶器や「大穴」と刻書された須恵器もある。令和３年度は、第６次調査で確認した遺構の全容把握と遺構の展開を確認するため調査を実施した。調査の結果、後世の削平が及んでいたものの、多数の柱穴群と調査区を北西から南東に向かって斜交する溝ＳＤ01を確認した。溝ＳＤ01は調査区中央付近で確認した平面がＬ字形の溝で、幅約0.8m・深さ約0.1mを測る。埋土から飛鳥時代以降の須恵器、土師器、鞘羽口や砥石などが出土した。溝は、Ｌ字の屈曲部を最高所として南から北へ西から東へむかって低くなっている。地形に沿って掘削されていることから、柱穴群を隔てる区画や西側から流れ込む雨水などの排水を目的に掘削されたものと考えられる。柱穴群は、調査区の東西にまとまりをもち、柵列や建物であった可能性がある。



調査位置図（国土地理院　1/25,000　法貴）

調査区を断ち割った結果、谷を埋める土石流堆積層の上に遺跡が立地していることがわかった。遺構・遺物が確認できないことから、本調査区の遺構の展開時期は、飛鳥時代以降と考えられる。

当事業に伴うこれまでの発掘調査成果と合わせると、平野部では古墳時代以降の遺構が展開することが判明していることから、当時の開発域が平野部から丘陵裾部まで時代を追うごとに広がっていくことがわかる。また、飛鳥時代以前は丘陵斜面に古墳群が造営されることから、当時の土地利用や景観を検討する上で重要な成果となった。

（竹村亮仁）

15. 井手遺跡第６次

所 在 地　亀岡市本梅町西加舎地内

調査期間　令和３年６月１日～令和４年３月４日

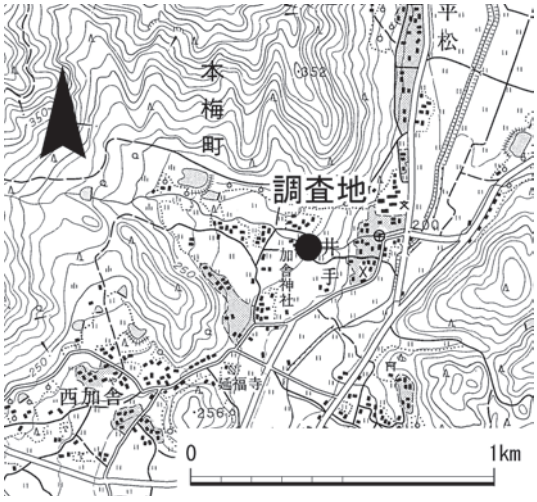
調査面積　5,055㎡

はじめに　井手（いで）遺跡は、亀岡市本梅町の行者山・半国山間の扇状地上に位置する集落遺跡である。今回、令和２年度に亀岡市教育委員会が実施した小規模調査において遺構・遺物が確認された地点について、拡張調査を行なった。また、別地点の小規模調査も実施した。以下、小規模調査と本調査を実施したＢ－２地区について、その概要を記す。

調査概要　小規模調査は、府道731号の南側にトレンチを８か所設け、遺構および遺物の有無を確認した。そのうち２か所で遺構を検出したため、拡張調査を行なった。

Ｂ－２地区では、中央部から北東にかけて、多くのピットを検出し、掘立柱建物５棟（ＳＢ2001～2005）が復元できた。主軸方向が２通りあるものの、各々の建物を構成する柱穴の出土遺物はいずれも11世紀中頃を示し、これらの建物は近接した時期に築造されたものと推定される。また、調査区東端、南東端、中央部西寄りに井戸を３基検出した（ＳＥ502～504）。ＳＥ502・503上層の出土遺物は土師器皿・瓦器椀が中心となり、下層では土師質の鍋・羽釜、上層のものよりも古相を呈する瓦器椀などが出土しており、掘削から廃絶に至るまでに半世紀ほどの期間があったと考えられる。その他、主に柱穴の集中する中央部東寄り付近に、ところどころブロック土が混入された箇所が確認されており、ピットの掘り込みの際に、黒ぼく土の堆積部分に多少の整地作業を加えていた可能性がある。

まとめ　今回の調査を通じて、本梅町域における中世初期段階での農村集落形成の様相について、良好な検討材料を得られた。今後、井手遺跡および周辺遺跡での発掘調査は継続して行なわれるため、引き続き遺跡の評価を進めていきたい。　（山本　梓）



調査地位置図（国土地理院　1/25,000　埴生）

Ｂ－２地区検出遺構図

16. 犬飼遺跡第11次

所 在 地　亀岡市曽我部町法貴茶屋下又ほか

調査期間　令和４年１月５日～令和４年２月28日

調査面積　540㎡

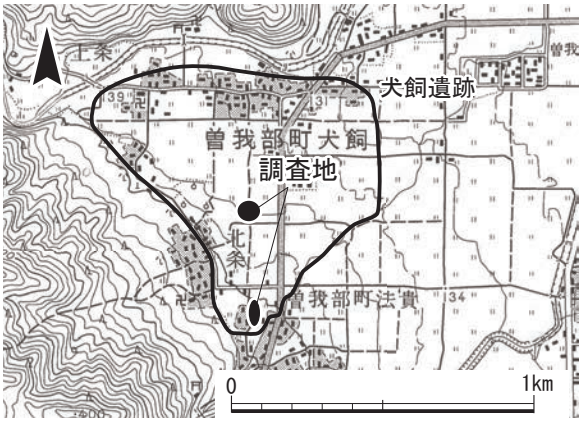
はじめに　犬飼遺跡は、亀岡市南東部の扇状地上に位置する古代から中世の集落跡である。これまでの調査で、古墳時代の水路・灌漑施設・集落のほか、奈良時代の集落、中世の居館・水路等を検出している。今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い、近畿農政局の依頼を受けて実施した。

調査概要　今回の調査は、遺跡範囲確認のための小規模調査で、南側の調査対象地に１～４トレンチ、北側の調査対象地に５～７トレンチと計７か所のトレンチを設定した。

１～３トレンチでは、柱穴や土坑のほか、調査地の東側を流れる法貴谷川の旧流路と考えられる流路状遺構等を検出し、古墳時代から中世の遺物が出土した。４トレンチの南側は暗渠により遺構が残存していなかったが、北に向かって落ちる自然地形を確認した。５・６トレンチでは顕著な遺構はなかった。７トレンチでは、西側の一部で溝や柱穴などの遺構及び、古墳～古代の土師器･須恵器などの遺物を検出している。また、東側の断ち割りで自然流路状の堆積を確認した。

まとめ　今回の調査では、いずれも調査地が摂丹街道と考えられている里道と近接しており、南側調査区の南方には、現在も「茶屋下又」など街道沿いであったと考えられる地名が残っている。南側調査区で検出した柱穴は街道沿いの建物の一部であった可能性があり、令和４年度には１～３トレンチを拡張して面的調査を行う予定である。また、北側調査区では、これまで西側の低位段丘上で奈良時代の建物の広がりが確認されており、東に向かってその遺構密度が低くなっていることが確認されている。７トレンチの西側は、この遺構の分布域にも近く、今回確認した溝や柱穴との関係が注目される。

（松井　忍）



調査位置図（国土地理院　1/25,000　法貴）

写真　７トレンチ遺構検出状況

17. 春日部遺跡第５次

所 在 地　亀岡市曽我部町中状使・前通

調査期間　令和３年９月14日～令和４年３月４日

調査面積　1,515㎡

はじめに　春日部（かすかべ）遺跡は、亀岡盆地南部の霊仙ヶ岳と曽我谷川によって形成された扇状地上に立地する。平成27年度から国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に伴う発掘調査を行っており、近接地で行った平成30年度の第２次調査では、古墳時代の竪穴建物や平安時代後期の掘立柱建物とそれらを区画する溝等を検出している。今回は第２次調査地の約10m東側の地点で本調査と小規模調査を行った。

調査概要　本調査地区は、標高約140m付近に位置し、古墳時代から中世の遺構・遺物を確認した。後世の棚田造成による削平等により、残存状況は悪い。また、扇状地の土石流堆積を複数確認した。

古墳時代では、前期の土師器を含む土坑を数基、中期から後期の竪穴建物１基（隅丸長方形、縦3.3m横4.2m）等を検出した。竪穴建物からは主柱穴４基と南西隅部で竈を検出した。

これらの他に、掘立柱建物１棟（総柱、東西６間（9.3m）・南北３間（7.2m）以上）と土坑数基等を確認した。掘立柱建物の主軸は約２°西に振る。柱穴内からは土師器皿や瓦器等の破片が出土しているものの、いずれも細片であり詳細な時期は不明瞭であるが、中世かそれ以前の時期の可能性がある。また、第２次調査で確認された平安時代後期の掘立柱建物群を区画する溝の続きは確認できなかった。削平されたか、もしくは第２次調査区と第５次調査区の間で屈曲している可能性がある。

小規模調査区では、本調査区の東側に７か所のトレンチを設定し調査を行ったところ、古墳時代後期頃の竈を持つ竪穴建物と古代から中世の掘立柱建物や土坑等を確認した。このことから次年度に面的な調査を実施する。

まとめ　古墳時代前期から後期の竪穴建物や土坑と、古代から中世初頭の掘立柱建物等を確認した。複数時期にわたる集落遺跡であることが判明しており、周辺の古墳や遺跡とも合わせて、今後集落の具体像を検討していく必要がある。　（荒木瀬奈）

調査位置図（国土地理院　1/25,000　法貴）

18. 水主神社東遺跡第16次

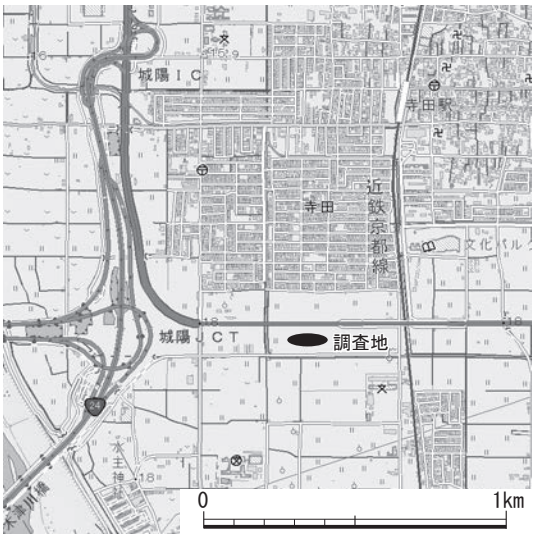
所 在 地　城陽市寺田大畔

調査期間　令和３年10月１日～令和４年２月10日

調査面積　1,420㎡

はじめに　水主（みぬし）神社東遺跡は、城陽市西部を流れる木津川右岸の微高地と後背湿地に立地している。これまでの調査により、縄文時代～近世の複合遺跡であることが判明している。今回は国道24号寺田拡幅事業に先立ち、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受け発掘調査を実施した。

調査概要　調査地は、近年まで水田として利用されており、調査トレンチは東西約80m・南北約18mの長方形を呈する。上層では、中世から近世の南北方向の島畑５基と素掘り溝30条を検出した。島畑は断面の土層観察から、中世段階に基盤層を削り出して島状に造成し、その後土を貼り付けて島畑の規模を拡大したことを確認した。島畑の間の低地部で溝群を検出した。耕作に伴う溝と考えられる。遺物は土師器・瓦器などが出土している。また、島畑と島畑間の基盤層から縄文時代晩期の土器が出土したが、遺構は確認できなかった。下層では、縄文時代の自然流路２条を検出し、調査地東側の流路内で杭列を検出した。過去の調査でも同様の流路が検出されている。自然流路はいずれも南から北に流れており、これまでの調査でも検出されている木津川の洪水によって形成された氾濫流路と考えられる。最下層では、自然木や杭を流路に設置した遺構を検出した。流路に自然木杭で据え付けた遺構と、その周辺で合計11本の杭を確認した。流路の流れを調整した施設と考えているが、明確な使用用途は不明である。自然流路の埋土中層からは、縄文時代晩期の土器、杭列周辺からは、縄文時代晩期の土器のほか加工木が出土した。



調査地位置図　（国土地理院　電子地形図25,000

まとめ　今回の調査では、調査区全体で中世から近世の島畑と耕作溝、縄文時代の自然流路２条と杭列が検出し。島畑は、過去の周辺調査成果に加え、中世以降の水主神社東遺跡一帯における耕作地利用を考える資料となった。杭列は縄文時代の氾濫流路を利用したことがわかる貴重な成果であり、周辺地域で縄文時代の人々が活動する様子が窺える成果となった。（クルーズ　真）

19. 小樋尻遺跡第12・13次

所 在 地　城陽市富野久保田・小樋尻・荒見田

調査期間　令和３年５月６日～令和４年３月２日

調査面積　6,460㎡

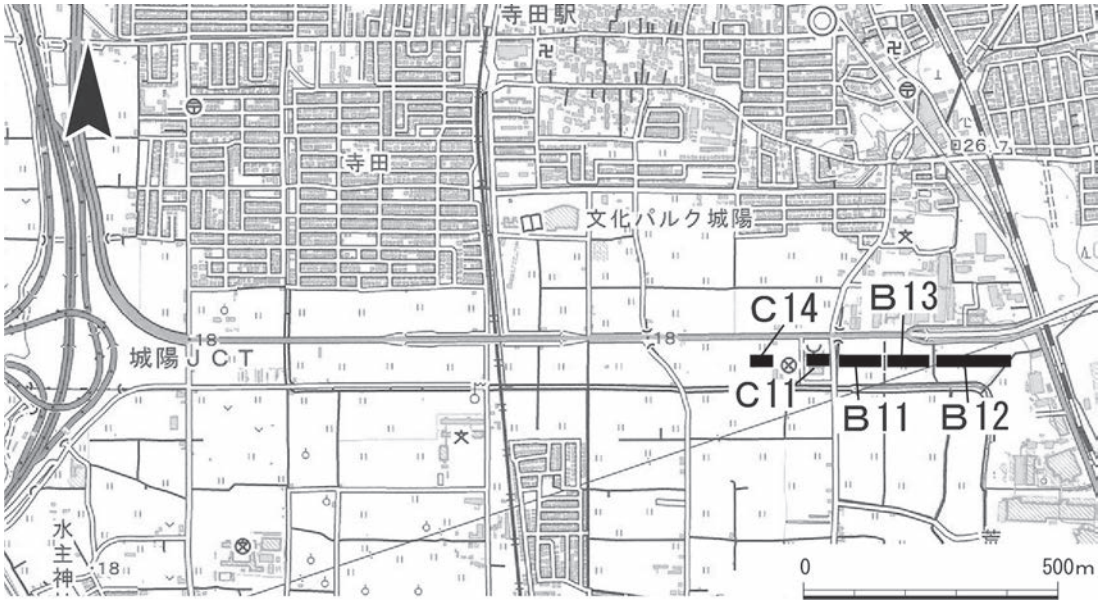
はじめに　小樋尻（こひじり）遺跡は、城陽市のほぼ中央部の木津川右岸に位置し、木津川により形成された沖積平野部に立地する。これまでの調査で、縄文時代後期～弥生時代の流路、縄文時代晩期の集落、古墳時代前期の集落や導水遺構などを伴う流路、古墳時代後期の集落、奈良時代の集落、古墳時代後期～奈良時代の溝、中世以降の島畑群が確認されている。

今回の調査は、国道24号寺田拡幅事業に先立ち、発掘調査を実施した。調査区は、小樋尻遺跡でＢ11区、Ｂ12区、Ｂ13区、Ｃ11区、Ｃ14区の５か所に分かれる。

調査概要

①Ｂ地区　Ｂ11区では、上層で竹を埋設した２条の暗渠遺構や溝を検出した。暗渠遺構は、５～７本の竹を埋設することで土壌中の水分を抜くためと考えられる。1596年の慶長伏見地震の影響を受けていることから中世末～近世初頭頃のものと考えられる。下層では、中世の南北の溝や土坑状遺構、瓦器埋納土坑、北東から南西に延びる古墳時代後期の溝２条、古墳時代初頭の井戸１基などを検出した。井戸は、円形で上径1.1m、底径0.65m、深さ1.4mである。底面は旧木津川の堆積層である砂層で、古墳時代初頭の土器片が出土した。

Ｂ12区では、竪穴建物２基、掘立柱建物１棟、井戸２基、土坑４基、溝20条を検出した。竪穴建物２基は調査区西端で重複して検出し、規模をやや縮小して建て直されたと考えられる。古い



調査地位置図（15,000分の１）

竪穴建物は一辺約４ｍ、新しい竪穴建物は一辺約３ｍである。竈や柱穴は検出されなかったが、床面には炭化物の堆積が広範囲にみられ、炭化物の上面や埋土から古墳時代後期の土師器が出土した。掘立柱建物は、調査区中央付近の北壁沿いで検出した。南北２間（約4.5m）、東西１間以上（3.0m以上）あり、建物の東側は関西電力の鉄塔基礎により壊されているため、正確な規模はわからない。柱穴は、一辺約40cmの方形を呈し、埋土から奈良時代の須恵器が出土した。調査区中央西寄りで検出した井戸は、円形の素掘りの井戸で、上径約2.0m、底径約1.2m、深さ約1.2mである。底面は、旧木津川の堆積層である砂層に達しており、弥生時代末～古墳時代初めの完形の土師器甕１点などが出土した。また深さ約0.6mから上層の埋土からは、土師器の破片や炭化物がややまとまって出土し、廃棄土坑として再利用されたと考えられる。調査区中央東寄りで検出した井戸は、隅丸方形状の素掘り井戸で、上辺で南北約1.3m・東西約1.1m、底辺で南北約0.8m・東西約0.6m、深さは約0.7mを測る。底面は、旧木津川の堆積層である砂層に達している。出土遺物はなく、時期はわからない。調査区中央付近で検出した円形土坑は、直径約3.0m・深さ約0.7mである。弥生時代末～古墳時代初めの土師器の破片や炭化物がややまとまって出土し、廃棄土坑と考えられる。調査区中央付近で検出した不定形土坑は、長軸が約3.0m、短軸が約2.0m、深さは約0.2mである。土師器の破片や炭化物が少量出土し、古墳時代前期の廃棄土坑と考えられる。調査区中央付近の南壁沿いで検出した方形土坑は、南北の検出長約1.1m、東西約１.4m、深さ約0.5mである。底面には焼土の堆積がみられたが、出土遺物はなく、時期はわからない。調査区南西端で検出した北西から南東に延びる溝は、幅約1.2～1.5m・深さ約0.3mである。埋土からは古墳時代後期の土師器が出土し、北東側に隣接する竪穴建物と関連する溝と考えられる。調査区中央西寄りで検出した北西から南東に延びる溝は、幅約0.9～1.2m・深さ約0.2～0.4mである。埋土から時期を示すようなものは出土しなかったが、埋没後に弥生時代末～古墳時代初めの土坑が掘削されており、この土坑より古い遺構と考えられる。調査区中央で検出した北西から南東に延びる溝は、幅約1.6～2.4m・深さ0.3～0.5mを測る。埋土からは奈良時代の須恵器・土師器の他、骨片が出土し、南西側に隣接する掘立柱建物と関連する溝と考えられる。

Ｂ13区は、西半と東半に分けて調査を行った。西半は井戸や溝の存在を確認し、東半は重機により表土及び堆積土の上層のみを除去し、今年度の作業を終了した。

②Ｃ地区　Ｃ11区では、中世以降の耕作に伴うと考えられる東西の溝１条を検出した。

Ｃ14区では、中世以降と考えられる南北の島畑１基と南北の溝８条を検出した。溝は、島畑上で１条、島畑の西側で３条、島畑の東側で４条検出した。

まとめ　Ｂ11・12区周辺では、弥生時代末～古墳時代前期に集落域としての土地利用がはじまり、その後古墳時代後期や奈良時代にも集落域として断続的に利用されていたことが明らかとなった。

Ｃ11区から東側では島畑は検出されず、Ｃ14区で検出した島畑が最も東に位置すると考えられ、島畑造営範囲の東端を知る貴重な成果となった。　（小泉裕司）

20. 鶴尾遺跡第２次

所 在 地　京丹後市峰山町丹波

調査期間　令和３年11月24日～令和４年３月４日

調査面積　500㎡

はじめに　鶴尾（つるお）遺跡の調査は、令和３年度に掛津峰山線広域連携交付金（改築）業務に伴い京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。鶴尾遺跡は、峰山盆地北端部から網野に抜ける谷筋に位置する。今回の調査は、同年６月に京都府教育委員会が実施した試掘調査で、奈良時代の須恵器や斎串が出土したことを受けて実施したものである。

調査概要　丘陵と農業用の溜め池に囲まれた谷部に、南北約40m・東西約13mのトレンチを設定して調査を行った。調査前の標高は約29mで、表土下に造成土、谷の埋土が堆積しており、表土下約２mで遺物包含層を確認し、その約0.5m下層で遺構面を検出した。

調査区中央で、幅約1.0～1.5m・深さ約0.4mの溝ＳＤ72を検出した。両側に直径0.1mほどの細い杭を岸沿いに数本打ち込んでおり、肩部に若干の盛り土を確認した。埋土内から燃えさし、斎串、人形などの祭祀遺物が出土した。そのほかに、70基ほどの土坑を検出したがその大多数がＳＤ72の北側に集中しており、調査区南半部にはほとんど遺構が検出されなかった。

ＳＤ72とその周囲に位置する溝ＳＤ66・土坑ＳＸ77から木簡が出土した。ＳＸ77からは縦21.9cm、幅4.9cm、厚み0.6cmの九九木簡が出土し（巻頭図版）、ＳＤ66からは縦14.1cm、幅約2.7cm、厚み0.3cmの「書央（ママ）書書書」と記された習書木簡が出土した。その他、遺物包含層から「大」（２点）、「工」、「西」、「倉？」、「政？」の文字が記された墨書土器が６点出土した。

まとめ　今回の発掘調査では、木製品が多く出土した溝をはじめ、多数の奈良時代の遺構を検出した。出土した九九木簡には九の段から五の段が記されており、九九全体の４分の３以上が書かれており、国内出土の九九木簡の中では最も多くの九九が記された木簡である。計算も正しく、抜けがないことから、九九一覧表のような用途が考えられる。また、墨書土器、斎串、人形も出土しているため、当地に何らかの役所的な施設があったことが考えられる。和名抄に記された古代丹波郡丹波郷の中心とされる「丹波」の字名を残す地で、識字層のいた官衙の存在を想定させる遺物が出土したことは非常に大きな成果と言えよう。

（大石雅興）

調査地位置図　（国土地理院　1/25,000　峰山）

長岡京跡調査だより・139

長岡京跡の発掘調査情報の交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的に、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。令和４年３月から令和４年６月までの例会では、宮域１件、左京域５件、右京域７件、京域外３件の合計16件の調査報告があった。その中で、調査の終了したものを中心に略述する。

調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

宮域　朝堂院西方官衙にあたり、乙訓郡衙推定地で**宮539次調査**が行われたが、既存の建物建設に伴い、地下遺構は破壊されていた。

左京　**左京第656次調査**（左京八条大路以南・大下津町遺跡、京都市南区淀水垂）は、河川改修に伴い令和３年度から桂川の河川敷内で始まった大規模調査の１年目の調査である。近世の道路遺構、室町時代の堀、弥生時代中期中葉から古墳時代前期にかけての住居跡・土坑などが重層して検出された。

左京第658・660次調査（向日市上植野町円山）では、長岡京期の柱列や方形掘形からなる掘立柱建物が部分的に検出された。**左京第661次調査**（向日市森本町東ノ口）は、継続する区画整理に伴う調査で、左京一条三坊九･十町にあたる。路面幅南北９ｍを測る一条条間北小路を検出した。また、北側の宅地内からは土師器皿の埋納土坑や柱穴が検出された。

右京　**右京第1255次調査**（開田遺跡、長岡京市開田３丁目）では、六条条間小路南測溝および西二坊坊間西小路東測溝が検出された。六条条間小路南測溝の下層から古墳時代後期の溝が検出された。なお、この調査はJR長岡京駅と阪急長岡天神駅の間を結ぶ長岡京駅前線の整備に伴う調査で、５月からはさらに西側で**右京第1262次調査**（開田遺跡、長岡京市開田３丁目）が開始されている。この調査でも引き続き六条条間小路南測溝が検出される予定である。**右京1259次調査**（下海印寺遺跡、長岡京市下海印寺北条）で、中央部に炉跡のような焼土坑をもつ方形土坑が検出された。瓦器椀が出土し中世の建物遺構と考えられる。このほか、古墳時代後期の竪穴住居も確認された。周辺の調査でも同時期の住居が点在している。なお、この調査で下海印寺遺跡第２次調査のグリッドを確認でき、１～４次調査（1978～1981年）地に座標値が与えられた。**右京1261次調査**（神足遺跡・勝竜寺城跡、長岡京市東神足２丁目）は、神足遺跡の東端の小畑川右岸で実施されたが、地形の改変が著しく、厚く盛土が堆積していた。

京域外　**長岡京跡隣接地**（京都市南区久世殿城町）では、道路整備に伴い２か所で範囲確認調査が実施され、長岡京期の遺物を含む土坑などが検出された。**笹屋遺跡17次調査**では、長岡京期の東西溝４条、南北溝１条が検出された。立地から湿気抜き用の溝と考えられる。このほか、奥海印寺遺跡でも調査が実施されたが削平が大きく顕著な遺構は検出されていない。

（肥後弘幸）

普及啓発事業

（令和４年３月～令和４年６月）

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業への参加などの普及啓発活動を行っている。

この間は、現地公開、埋蔵文化財セミナーなどの公開事業は実施していない。ここでは、普及啓発の一環として行った２事業を紹介する。

（１）普及啓発紙「もっと知りたい京都の遺跡」

令和３年度２冊目として作成した第10号は、「弥生時代の墳墓」と題して府内11の弥生墳墓を取り上げた。府南部では、下植野南遺跡に代表される大規模な方形周溝墓群が平地に築かれることが多く、一方、山がちな北部では、奈具墳墓群や赤坂今井墳墓など、丘陵部での造墓活動が目を引きます。

（２）設立40周年記念冊子「京都遺跡さんぽ」

当調査研究センターでは設立25周年から５年ごとに普及啓発冊子の刊行を行っている。25周年は、学校教材にも使えるようにと小学校向けを、30周年には中学・高等学校での利用を視野に、35周年では社会人を対象に考古学に親しんでもらう冊子を作成した。設立40周年にあたっては、歴史好きの観光客をターゲットにした冊子の作成に取り組んだ。

府内には、発掘調査を通じて、その様相が明らかになり、史跡や公園として保護された古墳や集落跡などの遺跡が多数あります。職員自らこれらの遺跡に行って取材し、Ａ５版56頁の小冊子としてまとめました。府内の遺跡（史跡）や資料館など117か所を紹介しています。是非、この手に取って現地に行って歴史を体感していただければ幸いです（当センターＨＰにて頒布方法を掲示しています）。　（肥後弘幸）

センターの動向

（令和４年３月～令和４年６月）

３　２　小樋尻遺跡（城陽市・国道24号）現地調査終了（５月６日～）、小樋尻遺跡（城陽市・国道24号その２）現地調査終了（９月６日～）

４　佐屋利遺跡（京丹後市）現地調査終了（５月12日～）、井手遺跡（亀岡市）現地調査終了（６月１日～）春日部遺跡（亀岡市）現地調査終了（９月13日～）、鶴尾遺跡（京丹後市）現地調査終了（11月24日～）

16　長岡京連絡協議会

22　第42回理事会（於：ルビノ京都堀川）

31　辞令交付式

４　１　辞令交付式

13　鶴尾遺跡・佐屋利遺跡木簡資料調査（於：奈良文化財研究所）

25　佐屋利遺跡（京丹後市）、カンジョガキ遺跡（京丹後市）、宇治市街遺跡（宇治市）、木津川河床遺跡（八幡市）現地調査開始

27　長岡京連絡協議会

28　辞令交付式

５　２　辞令交付式

６　法貴古墳群（亀岡市）現地調査開始

９　小樋尻遺跡（城陽市）現地調査開始

12　犬飼遺跡（亀岡市）現地調査開始、栢ノ木遺跡（井手町）整理等作業開始（於：京都府教育委員会桃山文化財事務所）

17　井手遺跡（亀岡市）現地調査開始

23　長岡京跡右京第1260次（長岡京市）現地調査開始

25　長岡京連絡協議会

26　春日部遺跡（亀岡市）現地調査開始

６　５　城陽市文化財講座「城陽市最新文化財情報－小樋尻遺跡の発掘調査成果－」小泉副主査講師派遣

８　第43回理事会（於：京都ガーデンパレス）

16　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（於：群馬県）　阿部局長、肥後課長補佐出席

22　長岡京連絡協議会

24　第14回評議員会（於：ルビノ京都堀川）

30　辞令交付式

編集後記

新年度を迎えましたが、新型コロナウイルスによる人の交流を基礎とする文化や経済へ与える影響は引き続き続いています。昨年度末から急に高まった世界情勢の不穏な状況も変わっていません。本号では、１本の論文と３本の研究ノートの寄稿をいただき、充実した内容となりました。６月に史跡指定の答申の出た「綴喜古墳群」に係る論文と研究ノートは注目されるところです。

また、巻頭に写真掲載した九九木簡が出土した鶴尾遺跡をはじめ多くの調査の略報も掲載することができました。

暑い夏を迎えた中での調査が続きますが、今年度も地域の歴史を明らかにする新たな調査成果や研究成果を得ることが期待されるところです。今後ともみなさまのご指導・ご鞭撻をよろしくお願いします。

（編集担当　肥後弘幸）

京都府埋蔵文化財情報 第143号

令和４年７月29日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　中西印刷株式会社
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER